〈論文〉

サセックス地誌史から見た国教主義と非国教主義の伝統
—17 世紀宗教センサスの分析—

須　永　　隆*

Conformism and Nonconformism in View of the Topography of Sussex: A Historical Analysis of the Seventeenth-Century Religious Census

Takashi Sunaga

Abstract

In Sussex nonconformity emerged in the fourteenth century, and persisted in some special regions such as High Weald and Low Weald despite the persecutions of the sixteenth and seventeenth centuries.This article analyses the seventeenth-century religious census and shows that nonconformity tended to emerge in proto-industrial regions while conformity spread across Sussex and was especially strong in the western parts of it.

1．問題の所在

イングランド史のユニークな特徴の一つに「非信従・非国教主義者の伝統」(nonconformist tradition) がある。14 世紀中頃ジョン・ウィクリフの教えから展開したロラード派 (Lollards) およびロラード主義 (Lollardy)、16 世紀後半から 17 世紀中葉までのピューリタンおよびピューリタニズム、1660 年の王政復古以降ではディセンターズ (dissenters) が、歴史を縦に貫き、その時々の体制派の宗派に抵抗し、自己の主張をなしている。イングランド史において、この「非信従・非国教主義者の伝統」が途切れることはなかった[1]。反対に、非国教主義が入り込めないようなアングリカン (国教主義) の伝統が長期にわたり持続した教区のあることも、わかってきた。

他方においてまた、イングランド経済史研究の現状よりすると、実証レベルが深化し、イングランド一国で語ることはもとより、特定の一州を一括りで語ることも、少なくなった、というより、できなくなった。現在では、地方史 (local history, provincial history) よりもさらに限定的な、地域史 (regional history) が主流となった。このイングランド地域史から、宗教史 (教会史) を扱う

* 亜細亜大学経済学部教授　Mail Address: sunaga@asia-u.ac.jp

研究も出現しており、経済史学、経済地理学と関連づけて、宗教地理学（religious geography）の成果も発表されている[2)]。

ピューリタン革命の際の党派構成、国王派・議会派についても、従来「ピューリタニズムの浸透が弱いイングランド北部・西部が国王派、ピューリタニズムの影響の強いイングランド東南部で議会派が支配的……」云々と言われてきたが[3)]、近年の研究では、特定の州内において、ある地域は国王支持に回る傾向があり、ある地域は議会派支持に回る傾向があると、地域的視点が強調されている[4)]。

内戦の党派構成の地域性については、サセックスについても同時代人が意識したことである。サセックスに生まれ、ケンブリッジ大学で学び、熱烈なピューリタンとして長期議会の秘書官（secretary）を務めたトマス・メイ（Thomas May, 1595–1650）は以下のように記す。

「The eastern end of Sussex (it being a long and narrow county lying for many miles upon the sea) stood firm to the parliament, and were very industrious in settling of the militia, by which means they were so happy as to preserve themselves in peace and quietness. But the western part of that county, by means of many revolted members of the parliament, inhabitants there, together with their allies and friends, was at the first in some distraction, though it continued not very long[5)].」（下線は引用者）

イングランドの産業発展との関連では、日本では、マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を下敷きにして、初期資本主義の発達と禁欲的プロテスタンティズムや「資本主義の精神」を重ねて説く――いわゆる「大塚史学」が存在した。農村工業（とくに毛織物工業や製鉄業）の担い手（「中産的生産者層」）とプロテスタント（ピューリタン、非国教徒）が重ねられて論じられた[6)]。

ヨーロッパにおける研究では、一時期、人口要因（人口圧力）と重ね合わせて、「プロト工業化論」（proto-industrialization）が活発に議論されたが、諸論文を読むと、非国教徒（本稿ではノンコンフォーミストと同義）がプロト工業化と深く係わっていたことがわかる。人口要因ではなく、特定の制度的要因が、農村工業や非国教徒を出現しやすくさせたとする論文も現れている[7)]。

本論文はイングランド東南部の州サセックスを対象とする。同様な接近方法が他州についても可能であることが判明しており[8)]、相互に関連しているが、本論文の手法は以下のような課題の解明に有益であると考えられる。

(1) 内戦時の国王派・議会派の支持勢力の検出。

(2) トーリーとホイッグ（後に保守党と自由党）の背後にある、支持基盤としての、イングランド教会（高教会派）と低教会派・非国教徒の地域的分布の解明。

(3) 経済史の長期のテーマとなっている、農村工業・プロト工業と非国教徒との関連[9)]やヴォランタリー・アソシエーションとしての非国教主義の出現の特徴。

(4) 19世紀ヴィクトリア朝における福音主義の伝播の社会環境、社会的背景。「閉鎖型村落」

(closed village) に対する「開放型村落」(open village)、「開放型教区」(open parish) の存在。教会史を軸とするイングランド地域史の構築[10]。

(5) マックス・ヴェーバーの指摘する、イングランドにおける二つのタイプの人間類型出現の社会的背景[11]。「ピュウリタン革命の際の〈騎士派〉(王党派) と〈円頭派〉(議会派) とはたがいに、別々の政党というだけではなくて、根本的に異なった種族の人間だという意識をもっており、注意深く観察する者はそれに賛成するほかはあるまい」、「この差違は、もちろんイギリスにおいても、いまなお存続している。ことに在村地主層は〈ありし日の愉しきイギリス〉の基盤として、今日に及んでいるし、宗教改革以後の歴史全体は、二つの型のイギリス人気質の闘争とみることができる[12]」といった指摘の地誌的背景の解明。

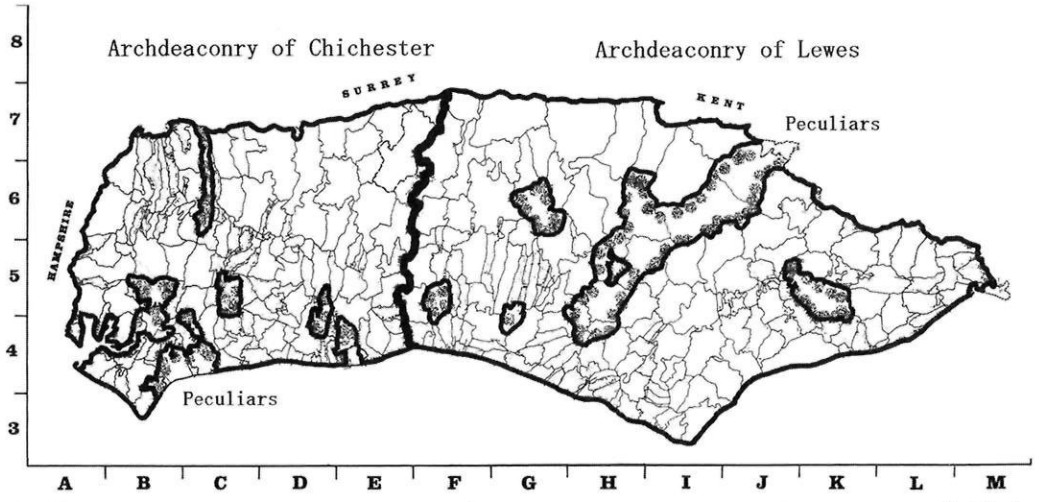
2．サセックスにおけるピューリタニズムの出現

サセックスのピューリタニズムの広がりを提示する例として、1572年の以下のような事件がある。内容はこうである。「1572年5月14日サセックス・ウィールドの一教区ウォーブルトン (Warbleton) (5J) (図1の番号・記号を指す。以下も同様) において殺人事件が発生した。夜11時頃、とある男と (その仲間の) 数人が草地に立っているメイポール (maypole) を取り除こうとしていた際に、その男が首を打たれて殺された[13]」のである。

ウォーブルトンは、東部サセックスに位置し、少し南に移動すると平場に接しており、北部に向かうとケントに至る、ウィールドの端にある教区である。当教区の周辺では、古くから製鉄業が活発であり、ウォーブルトンにも溶鉱炉 (blast furnace) が存在した。当時、製鉄業が盛んなこの教区において、メイポールをめぐる殺人事件が生じたのである。

ところで、なぜメイポールに重要な意味があるのだろうか。イングランドの文化史を扱う際に、このメイポールは象徴的な意味を持っている。メイポールとは「古来からの多産 (fertility) の表象であり、……夏の始まりの祝いのために森から木を一本伐ってきて村の草地に立てた[14]」ものであり、教会側からみると、民衆の無規律と不摂生、不道徳を示す象徴でもあった。フィリップ・スタッブス (Philip Stubbes, 1555-1597) は「メイデー、聖霊降臨祭、一年のその他の時に備えて、あらゆる教区、町区では、男も女も、子供も、老人も若者も、……一ヵ所に集まる。ひとつになって、あるいは別々の集団となって、あるものは森に行き、あるものは岡や山々に行き、そこで一晩中、楽しい時を過ごす。朝になって、白樺の大枝と木々の枝を持って戻ってくる。それでもって、彼らの集まりを飾るのである。……彼らの一番の宝物は、彼らが崇敬の念をこめて持ってくる、メイポールである[15]」と記す。バリー・リーは「16・17世紀イングランド史の重要な鍵は卑しいメイポールにある。というのもメイポールこそは、イングランドの文化戦争の象徴的な焦点だったからだ[16]」と書いている。このメイポールをめぐる文化摩擦が、1570年代のウォーブルトンで、殺人事件にまで発展したのである。

図1　サセックスの教区



（出所）　Cecil R. Humphery-Smith (ed.), *Atlas & Index of Parishes Registers*, 3rd edition, Phillimore, 2003, p.35. 教区名を外し筆者が再加工した。

（注）　サセックスは、教会行政においては、カンタベリー大主教管区（Canterbury Province）の管轄下にあるチチェスター主教区（Chichester Diocese）に属し、当主教区は、さらにチチェスター大執事管区（Archdeaconry）とリューウェス大執事管区（Archdeaconry）に分かれる。その下に（地方）執事管区（rural deanery）があり、さらにその下に教区（parish）がある。

ところで、ウォーブルトンは、ヒースフィールド（Heathfield）（5J）、バーウォッシュ（Burwash）（6J）とともに、東部サセックスの三角地域を形成しており、周辺地域の教区も含めて、生まれてくる子供にピューリタン的な洗礼名を授けるケースがみられる。タイアック教授によれば、ピューリタン的洗礼名が確認される年号は、ヒースフィールド（1584年）、ウォーブルトン（1585年）、バーウォッシュ（1586年）、ワーティリング（Wartling）（1588年）（4J）、ハーツマンスー（Herstmonceux）（1589年）（4J）、ウォドロン（Waldron）（1594年）（5I）、ヘイルシャム（Hailsham）（1589年）（4I）、オールフリストン（Alfriston）（1587年）（4H）、ウィルミングトン（Wilmington）（1591年）（4I）、フォキングトン（Folkington）（1590年）（4I）、イーストボーン（Eastbourne）（1587年）（3I）、ブライトリング（Brightling）（1599年）（5J）、セールハースト（Salehurst）（1587年）（6K）、ノージアム（Northiam）（1588年）（5L）となっていた。また、すぐ北に位置するケントにおいては、テンタデン（Tenterden）（1582年）、ロルヴァンデン（Rolvenden）（1584年）、クランブルック（Cranbrook）（1583年）となっていた[17]。

後段でも述べるように、この一帯は広くウィールドと呼ばれ、農業的には、拡散した農場（scattered farms）と囲い込まれた耕地（enclosed field）からなる「森林・牧畜経済」（a wood-pasture economy）を主とし、富裕な農民層に対しては "yeomanly gentry" という言葉も使われていた。このウィールドの一隅にあるウォーブルトンは、9平方マイルの教区であり、1930年代になっても、

その半分は牧草地（pasture）、6分の1は森林からなり、16世紀末における人口は約400人だった。1586～96年の間に、93人の子どもにピューリタン的洗礼名が与えられ、これに対して非ピューリタン名は124人であった。サセックス・ウィールドにおいては、ピューリタニズムの影響を示す洗礼名が数多く検出されるが、「とくにウォーブルトンは、高い割合のピューリタン名が見出される教区だった[18]」とタイアック教授は記す。

3．サセックスの地誌的構造—二つの対照的な地域

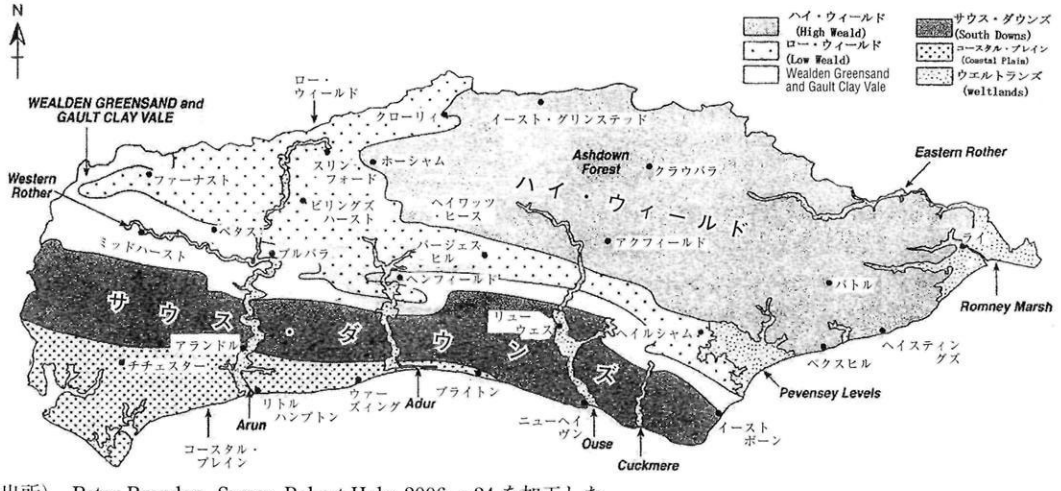
イングランド史において、戦前から戦後にかけての経済地理学（economic geography）の急速な発達により、中世以来のサセックスが二つの対照的な地域——南西部を中心とするチョーク・カントリー（the Chalk Country）と北東部を中心とするウィールド（the Weald）——からなることはよく知られてきた[19]。以下、簡略にサセックスの対照的な地誌構造を概観してみよう。

A. 土地形態

(1) ダウンランズ（図2参照）

①前者のチョーク・カントリーはダウンランズとも呼ばれ、基本的には地味の肥えた平場地である。サウス・ダウンズ（South Downs）、コースタル・プレイン（Coastal Plain）およびスクラップ

図2　サセックスの地誌的構造



（出所）　Peter Brandon, *Sussex*, Robert Hale, 2006, p.24を加工した。

（注）　サウス・ダウンズは、サセックスで最も地味の豊かな地域であり、小麦・大麦が栽培される。一部地域では飼料用のオート麦がつくられる。中間のWealden Greensand and Gault Clay Valeは中程度の地味の肥沃さであり、当地域では小麦・オート麦が栽培され、同時に牧羊・牧畜もおこなわれる。東南部のPevensey Levelsは湿地帯で、牧羊とオート麦の栽培がなされる。ロー・ウィールドおよびハイ・ウィールドは、サセックスでもっとも地味の悪い地域であり、穀作には適さない。

フット・ベンチ（Scrapfoot Bench）が、これに該当する。最初のサウス・ダウンズは南西部に流れる帯状の地層である。南面から北面にかけて幅4～6マイルのなだらかな斜面であり、北面では、ポイニングズ（Poynings）（5F）―イーストボーン（Eastbourne）（3I）間で約25マイルの険しい急斜面となっている。土壌はしばしば軽土（light loams）、泥灰土（marl）、砂礫層（gravels）からなっており、土地の性格上、耕作（arable cultivation）に適していた。コースタル・プレインはサセックス南部の海岸地帯で、またGreensand and Gault Clay Valeは、ウィールドとの境に位置する、細長い帯状の小地域である。

②このダウンランズは、中世期に集中した植民がおこなわれ、比較的小さなマナ単位、教区単位から形成されていた。また農地や教区（parish）の境界線はしばしば、このマナの位置に重なっていた[20]。

③資源という観点からみた場合、この地域には森林が存在することはめったになかった。そのために産業の原材料となる薪や建築資材となる木材は、ウィールドで調達されたものを使用していた。言い換えると、ダウンランズは、森林資源と称しうるものがほとんどない、つまりその景観を遮るものがない、むき出しの広い土地柄だったのである。必然的に、森林資源は貴重なものとなり、木材価格もウィールドと比較して数倍の高値のついたことが、当時の記録から判明する。

④ダウンランズの土地制度や農地保有形態に検討を加えてみると、この地域の特殊性がさらに浮き彫りになる。まず16世紀中葉から17世紀初頭までの、当地域のマナ（荘園）「領主直営地」（demesne）についてみると、多くのマナが何エーカーにもわたって直営地を保持しており、それを大量に貸し出していた。「直営地貸出」が500エーカーを越えるものでは、ウエスト・ディーン（West Dean）（5B）におけるアリシストン（Aliciston）、ベリック（Berwick）、エクシート（Exceat）、続いて、イースト・サセックスのファール（Firle）におけるファルマ（Falmer）（4G）、ヘイトン（Heighton）、また、ロドメル（Rodmell）（4H）にあるノースイーズ（Northease）、さらにシーフォード（Seaford）（3H）においては、プラントン（Plumpton）、プレストン（Preston）、ロッティングディーン（Rottingdean）、サットン（Sutton）、サンドル（Sandore）等があった。さらにまた、若干規模は縮小するが、300～400エーカーの貸出も、かなり見られた。

貸出方法もまた特徴的であった。こうした直営地は、多数の農民に貸し出されるというよりは、一括して、特定の定期借地農（lease holders）に貸し出されていた。それを示す例としては、ファールにおけるベディングハム（Beddingham）、チャールトン（Charleton）、また、オールシストン（Alciston）（4H）におけるプラントン（Plumpton）、ポイニングズ（Poynings）、ティルトノ（Tiltono）、および、フォウキングトン（Folkington）（4I）におけるウートン（Wootton）があった。

⑤またダウンランズにおける農民保有地の種類としては、全体として「自由保有農」（freeholders）が少なく、権利の上からは、より立場の弱い「慣習土地保有農」（copyholders）が支配的であった。例えば、17世紀前半から18世紀にかけてのディップ・スロープ（dip-slope）とウース・ヴァレー（Ouse-Valley）では、23マナのうち4マナ（Southease、Hayton、Falmer、Tele-

scombe）において自由保有農が全く存在しなかった。こうした流れの中で、ダウンランズにおいては、18世紀初頭に至ると、地方の大領主が支配する大農場が形成され、ハイ・ファーミングを営む借地農が出現する[21]。

(2) ウィールド

①ウィールドはサセックス北部だけでなく、ケント南西部、サリー東南部にまたがる広域地帯である。当地帯はハイ・ウィールド（High Weald）とロー・ウィールド（Low Weald）からなるが、そこでの土壌は「砂土」（sands）や「粘土質」（clay）であり、一言でいうと、穀作よりも家畜、牧畜に適した土地柄であった。この一帯は草地（grassland）に覆われており、湿気も多く、牧羊に適さない場所であった。16～17世紀になっても、あちこちで深く「森林」（forests）に被われていた[22]。

②土地保有形態については、ウィールドは「小土地保有」（smallholdings）が中心であり、広い「耕作地」（arable）すなわち開放耕地はしばしば存在せず[23]、100エーカーに満たない「自家農業」（family farms）が主流であった。例えば、17世紀中葉、ウィヴルズフィールド（Wivelsfield）（6G）の平均土地保有規模は50エーカー以下、ホーステッド・キーンズ（Horsted Keynes）（6G）、タイスハースト（Ticehurst）（6J）では70エーカー以下となっていた。サセックスにおいてウィールドは、「二圃制・三圃制というような開放耕地制度が存在しなかった[24]」場所の代表でもあった。

③ウィールドにおける小土地保有の種類については、1567年から1650年の18マナ（荘園）のうち、10マナは「自由土地保有農」だけからなり、5マナは「慣習土地保有農」（copyholders）のみから構成され、両者の混合からなるマナが3ヵ所あった。そして自由土地保有農のみから構成された10マナでは、農民219人のうち、約65%は50エーカー以下の保有であり、20%が100エーカーを越える程度であった。同様に慣習土地保有農からなる5マナでは、農民174人中75%が50エーカー以下の土地保有であって、全体的にはウィールドは、「自由土地保有農」中心の小農社会であった。

④領主直営地については、ダウンランズでは「一括貸出」（block-leased）が一般的傾向であったのに対して、ウィールドではそれと対照的に、直営地は通常、複数の定期借地農に「分割」して貸し出されていた。1597年から1598年までのバックハースト・テリール（Buckhurst Terrier）、ハートフィールド（Hartfield）（7H）、イースト・グリンステッド（East Grinstead）（7H）、ウィズィハム（Withyham）（7I）にまたがるマナにおいて、例えば、バックハースト・マナでは、42人の保有農のうち5～20エーカーを定期借地しているのが18人、51～200エーカーが14人、201エーカー以上の借り受けが10人となっていた。

また時代を下り、1842年のハートフィールドとウィズィハムの土地利用をみると、16,412エーカーの内、牧草地（Pasture）5,256エーカー、穀作地（Arable）5,919エーカー、林（Wood）1,373エーカー、森等（Forest, common, &c.）3,857エーカー、小片（Fractions）7エーカーとなってい

た[25]。森林の多いこの地において、穀作地と共に、牧草地としての土地利用が目立つのが、特徴的である。

⑤地代はどうであったか。自由土地保有農の地代については、通常は非常に軽く、固定かつ名目地代に過ぎず、農民負担としてごく僅少なものであった。相続上納金（relief）については通例で一年分の地代額であり、それに最上家畜（best beast）の相続上納物（heriot）があるだけだった。

またサセックスに広く存在した慣習土地保有農に関しても、その地代は一定かつ低額であり、通常、エーカー当たり半ペニーから6ペンスの間であった。これに相続上納物として、自由保有農と同様に、最上家畜が付け加わった。こうした慣習はダウンランズでもウィールドでもほぼ同様であったが、ウィールドの場合には、相続の際に一定の上納金だけを求められたのに対して、ダウンランズでは、かなり高額な参入負担金（entry fine）を請求された。

こうして18世紀初頭に至ると、ウィールド（特にハイ・ウィールド）では、しばしば穀作地を持たない小土地保有農が存在し、100エーカー未満の家族農場が支配的となる[26]。

B．産業構造の特徴

(1) ダウンランズの産業構造―「平場穀作地帯」

①これらのダウンランズの土地は具体的にはどのように利用されていたのであろうか。これについて総体的には、ダウンランズの土地利用は、どのマナにおいても「穀作」と「牧羊」に向けられていたといえる[27]。プレストン（4G）、スタンマー（4G）、ノースイーズ（4H）、ロドメル（4H）のように、内部に領主直営地と農民保有地を持つマナを見てみると、農民保有地は牧羊よりも穀作の方に重点が置かれていた。例えば、プレストンの慣習土地保有地については、穀作地は233エーカーであるのに対して、牧羊地が90エーカーの利用となっていた。ノースイーズでは穀作地314エーカーに対して牧羊地は231エーカーであった。ロドメルでは穀作地が466エーカーなのに対して、牧羊地がその半分の233エーカーでしかなかった。こうした諸例から、ダウンランズが、牧羊をおこないながらも、穀作を中心として展開した世界であったことがわかる。

②ダウンランズの中心的農業である穀作の内容にはどのような特徴があったろうか。1561～1635年の記録で見ると、「小麦」（wheat）、「大麦」（barley）が主だった作物であったことは、どのマナにおいても共通している。その他ディップ・スロープ（Dip-slope）地域のビショップストーン（Bishopstone）（3I）やスクラップフット地域のファール、ベディングハム（4I）、イーストボーン（3I）ではオート麦（oats）や豆類（pulses）も作られていた。

さらに「牧羊」については、あるマナでは全く記録は存在していないが、ヴァレー・フランク（Valley-flank）地域のエクシート（Exceat）（800頭）、アイフォード（Iford）（4G）（297頭）、またスクラップフット地域のベディングハム（4H）（60頭）、ベリック（Berwick）（4I）（75頭）、イーストーボーン（3I）（60頭）で確認できる。ダウンランズではその他に、僅少ながら牛や豚も飼育していた。豚の飼育がこの地帯で僅少なのは、それがマナ規制に引っ掛かってしまう可能性があっ

たからである。

③西にアルン（Arun）川、東にアドゥル（Adur）川と二つの川に挟まれ、南はリトルハンプトン（Littlehampton）（4D）からラーンシング（Lancing）（4E）、北はthe Chalk and Upper Greensandがウィールドと重なる地域は、面積100平方マイルのサウス・ダウンズの中心地帯である。アマリィ（Amberley）（5D）、ノース・ストウク（North Stoke）（5D）、バーファム（Burpham）（5D）、ウォーミングキャンプ（Warmingcamp）（4D）、アングマリング（Angmering）（4D）、パッチング（Patching）（4D）、クラパム（Clapham）（4E）、フィンドン（Findon）（5E）、サンプティング（Sompting）（4E）、クームズ（Coombes）（4E）、ブランバァ（Bramber）（5E）、ステニング（Steyning）（5E）、ウィストン（Wiston）（5E）、ウォッシングトン（Washington）（5E）、サリングトン（Sullington）（5E）、ストリングトン（Storrington）（5D）、パルハム（Parham）（5D）、ラカム（Rackham）（7E）が、そこに位置する教区（ラカムを除く）である。この一帯は、富裕な土地所有者（owner-occupiers）と借地農（tenant farmers）を軸とする農業を基本とし、農民がイングランド教会の聖職者と領主とに尊敬の念を強く抱く傾向がある「閉鎖型社会」（closed communities）——閉鎖型教区・村落ともいう——から成り立っていた[28]。

この特徴は特定の時代を越えて長期わたっており、1840年では、40,725エーカー中、ノーフォーク公爵（Duke of Norfolk）（19%）、チャールズ・ゴーリング（Charles Goring）（11%）、ジョージ・ウィンダム（Col.George Wyndham）、（10%）、クロフツ（Rev.P.G.Crofts）（4%）、ジョージ・ペチェル（Capt.George Pechell）（3%）、ロバーツ・クルツオンとツーチェ男爵夫人（Hon.Robert Curzon and Baroness de la Zouche）（3%）、リチャード・エンスリーとロード・ボストン（Sir Richard Ainslie and Lord Boston）（3%）、ジョージ・ギブソン（George Gibson）（3%）、さらに下って　1910年では、40,747エーカー中、ノーフォーク公爵（Duke of Norfolk）（26%）、チャールズ・ゴーリング（CharlesGoring）（19%）、ロード・ルコンフィールド（LordLeconfield）（8%）、ロード・ツーチェ（Lord Zouche）（7%）、リチャード・ゴッドマン（Maj.Gen.Richard Godman）（5%）、トゥリストラム夫人（Mrs B.E.Tristram）（5%）、ヘンリ・パッドウィック（Henry Padwick）（4%）、レディー・サマーセット（Lady Somerset）（3%）、1940年では40,411エーカー中、ノーフォーク公爵（Duke of Norfolk）（23%）、ジョン・ゴーリング（John Goring）（15%）、クリーヴ・ピィァソン（Hon.Clive Pearson）（8%）、ウリック・トィン（Col.Ulric Thynne）（5%）、ガイ・トリスタン（Maj.Guy Tristran）（4%）となっていた。この特定個人への土地集中（大土地所有）の存在は、上記の閉鎖型村落の特徴を確認するのに役立つだろう[29]。

④ところで、ダウンランズの工業活動はどうだったのであろうか。これについては実際のところ、18世紀末に至っても、これといった工業的活動は検出されていない。仮にあったとしても、せいぜい大工（carpenters）、車大工（wheelwrights）、かじ屋（blacksmiths）、レンガ積工（bricklayers）等、農作業に関連する若干の業種でしかなかった[30]。また、そうした職人的工業の活動も、地域限定的な需要を満たすものでしかなかった[31]。

(2) ウィールドの産業—森林牧畜地帯

①ウィールドは、元来が森林地（woodland）を中心とし、その他に牧草地（pasture）や草原（meadow）、荒蕪地（wastes）からなる土地柄であるために、穀作そのものに適さなかった。また、その他の作物栽培にしても、ダウンランズとは異なる様相を呈しており、例えば17世紀初頭ロー・ウィールドのカードフォード（Kirdford）（6D）における、ある農民の作付け割合は、耕作地34エーカー中14エーカーのみが小麦栽培に充てられ、残りの半分以上の土地が燕麦（oats）や豆類等の飼料作物の栽培に充てられていた。

②一方、これに対してハイ・ウィールドについてはどうであったろうか。1580～1650年までの8件の農場を検討してみると、平均130エーカーが小麦栽培に充てられ、143エーカーが燕麦、豆類に充てられており、ロー・ウィールドほどには飼料作物への偏向は認められないが、やはり当地域においても飼料作物栽培への重点移動があった。

こうして、ウィールドが全体的に家畜のための飼料作物の栽培に特化する傾向の強いことがわかったが、さらにこういった傾向は、財産目録も残せない小土地保有農であるほど、強まっていたようである。

③諸工業の分布

ウィールドは、地味が悪く穀作には向かず、伝統的農業には相応しくない土地柄であったために、純農業所得を補完する目的から、非農業的な産業が生じることになった。すなわち、様々な種類の職人的工業の出現である。ウィールドの豊富な森林資源、水資源、それに由来する水力の存在、原材料の存在などが、諸工業の出現に有利に働いたのである。

ウィールドの農民は、穀作用の狭い耕地のほかに、牧草地を保有し、数匹の牛や豚などを飼育しながら、同時に非農業的職業にも従事する集団だった。農業の他に以下のような工業活動にも従事していた[32]。

ⓐ毛織物工業（woolen industry）

ウィールド地方一帯に、羊毛、麻の糸紡ぎつまり紡糸工程が、下請けの家内工業という形で広がっていた。また様々な種類の織物製造に携わる織布工も、広範囲に存在した。サセックスの織物は最上のものでも「いくぶん粗末な生地」（somewhat coarse texture）と言われたくらいの代物で、それらは周辺地域向けの製品であった。立地に関しては、ウィールドでも北東部が中心で、これは、その北にケントの広幅織工業が控えていたからである。北東部ウィールドのウース河流域——アーディングライ（Ardingly）（6G）（1573年）、フレッチング（Fletching）（6H）（1656年）、マーズフィールド（Maresfield）（6H）（1545年）、アクフィールド（Uckfield）（5H）（1612年）、バクステッド（Buxted）（6I）（1649年）、フラムフィールド（Framfield）（5I）（1549年）、イスフィールド（Isfield）（5H）（1558年）、ミチェルハム（Michelham）（1619年）、メイフィールド（Mayfield）（6I）（1570年）、ロバーツブリッジ（Robertsbridge）（1567年）——に、フリング・ミル（fulling mills）が検出される[33]。

同じく北東部では、関連業種として、ケマーズ（kemmers）、縦糸ケマーズ（warpkemmers）、縦糸紡毛工（warpspinners）等も検出されるが、織元はごく少数しか存在していない。この業種の大部分は周辺地域の小屋住み（cottagers）が担い、彼らが下請け工業として、刷毛、紡毛、織布をおこなったのである[34]。

ⓑ手袋（gloving）製造業

手袋製造業は、ウィールドの主要業種であり、羊毛・羊皮・牛皮の加工を通じて製造されてた。製品は、北部フランスに輸出され、粗製品は、収穫労働者や大工のような、手仕事をする労働者のために作られた。手袋を作るには上記の原材料とともに水や燃料用の薪も必要であったが、ウィールドにはこれらの条件を充たす環境があった。

ⓒ皮なめし業（tanning）

皮なめし業は、サセックス・ウィールドだけでなく、イングランド全般の牧畜農村に存在する業種であり、中心はロンドンであったが、レスター、ヨークシャー南部、ミドランズ西部、ディーンの森（the Forest of Dean）でもおこなわれていた。原材料の皮革は牧畜業の副産物でもあり、皮革業（leather industry）に従事することは、皮全般を扱うことを意味し、関連分野への波及効果も期待できた。製靴・皮手袋・皮の衣服をはじめ、あらゆる皮革製品を製造することになった[35]。と同時に、皮革業は資本出資をあまり必要としなかったから[36]、農民にとっては相性のよい業種だった。

皮なめし業の中心は、ヘンフィールド（5F）、ハーツピアポイント（Hurstpierpoint）（5F）、クックフィールド（6G）、リューウェス（4G）、バーカム（5H）、メイフィールド（6I）、ウィンチェルシィ（5L）であった。最初に取り上げたウォーブルトン（5J）でもおこなわれていた。この地域で製造された皮革製品は、ライや東部サセックスの諸港から輸出されていた[37]。基本的にはサセックスやケントの皮革は輸出用であって、サホークの皮革がロンドンに送られたのとは対照的だった。

ⓓレンガ・タイル製造業（brick-and tile-making）

この業種は石灰の燃焼（lime-burning）と結び付いており、粘度層の厚いロー・ウィールドが最も適していた。レンガ・タイル製造や製陶業はウィールド一帯にかなり集中しているが、分布図を見るかぎり、ロー・ウィールドが中心であった[38]。16世紀末から17世紀初頭にかけて製造が確認できる地域は　セント・レオナルズ・フォレスト（St. Leonard's Forest）、カウフォウルド（Cowfold）（6F）、ホリングトン（Hollington）（4K）、リングマァ（Ringmer）（5H）、ヘイルシャム（Hailsham）（4I）、バーカム（Barcombe）（7G）である。関連業種には、製陶業（pottery）があり、リンドフィールド（Lindfield）（6G）、チェイリィ（Chailey）（5G）、ニューイック（Newick）（5H）、アクフィールド（Uckiield）（5H）、バクステッド（Buxted）（6I）の周辺地域で発展し、その伝統は18世紀まで残存した。

サセックスにレンガ・タイル製造が拡大するのは、18～19世紀においてである。1672年に、

ウィールド東部チディングライ（Chiddingly）（5I）の教区委員に対して、ディッカー・コモン（Dicker Common）で製造したレンガを、ニコラス・ウィラード（Nicholas Willard）という人物が供給していたとする記録がある。彼は独立のレンガ製造業者だったと考えられる。1703年には、ボシップ・グリーン（Boship Green）の土地を賃貸して製造する者もいた。ただし製造が活発化するのは18世紀後半になってからである。チディングライやヘリングライ（Hellingly）（4I）を中心にレンガ製造場（brickyards）の数が増加していく。その経営規模は小規模（fairly small-scale operations）であり、代表的な製造業者ガイ家（the Guys）は、1760年代にディッカー・コモンの西面で経営をおこなっていたが、彼らは30エーカー程度の土地を所有し、数人の職人を使用する農民兼職人（farmer and artisans）であった[39]。

ⓔガラス製造業（glass industry）

サセックスのガラス工業の歴史は古く、すでに14世紀に確認できる[40]。しかし1550年代に西部サセックスで活性化し、これを加速度化させたのは、16世紀にやってきたユグノー移民だった[41]。外国人たるユグノーつまりフランス人プロテスタントが、当州に技術を紹介したのである。フランス人は窓ガラス（window glass）、緑色飲料用器（green drinking vessels）、薬容器（apothecaries wares）の製造技術をもたらしたといわれる[42]。1570年代になると、イースト・サセックスでも製造されるようになり、以来、当州の重要産業の一つになった。1570年代から80年代にかけてウインチェルシー（Winchelsea）（5L）、ライから輸出されている。

生産の中心地としては、カードフォード（6D）、ハンブルトン（Hambledon）（サリー州）、チディングフォウルド（Chiddingfold）（サリー州）、ワイズバァ・グリーン（Wisborough Green）（6D）、ラーガシャル（Lurgashall）（7C）、アルフォウルド（Alfold）（サリー州）、ユーアスト（Ewhurst）（5K）、ビリングハースト（Billingshurst）（6E）があった。

代々ガラス製造に従事する代表的な家族も存在し、最も古いのでシュルテール（Sehurterre）家、ペィトゥ（Peytowe）家、ストラドウィック（Strudwick）家、モーズ（Mose）家などがあった。これらの一族は徐々に土地を集積して地主（landowners）になっているが、その先祖はヨーマン（yeomen）であった。

当地域でガラス製造業に従事した外国人としては、ノージアム（5L）でジョン・スミス（John Smith）とヴェネチア出身の製造業者（2人）がいた。またアントワープ出身の　ジェームズ・カーレ（James Carré）がファーンフォールド・フォレスト（Fernfold Wood）のフェルネフォル（Fernefol）にガラス工場を建てた。1580年代になると、ヘイスティングズ（Hastings）（4K）でフランス人（おそらくユグノー）による経営もおこなわれている。

17世紀の教会史家として著名なトマス・フラー（Thomas Fuller, 1608～61）は、教会史のほかに『イングランドの名士たち』（Worthies of England、1662年、没後出版）を書いている。この中でサセックスのガラス工業に触れており、「ツロ（Tyre）が提供するガラスほどに精巧ではなく、……ヴェニス付近のチオーサ（Chiosa）で製造されるガラスほどに純粋ではないが、ガラスの多く

は当州で製造されている。だが、きめの粗いガラスでも、船内で飲むというような、通常タイプ（sort）のものについては、十分役立っている」と記す。これはウィールドで製造されるガラス製品が、海外輸出用の高級品というよりは、むしろ周辺の一般市場向けであったことを示しているのだろう。また「この技術に従事する労働者は1557年以降急増した[43]」とあり、そのあとにチディングフォウルド（Chiddingfold）という地名が出ており、この労働者は外国人移民のことを指していたと考えるのが妥当であろう。

ⓕ製鉄業（iron production）

製鉄業は、サセックス、ケント、サリーにまたがるウィールドで、紀元前1世紀のローマ時代の頃からおこなわれていた[44]。13世紀の史料によると、サセックス・ウィールドに限定すると、ハイ・ウィールド中央に位置するウェールズビーチ（Walesbeech）（イースト・グリンステッド付近）（7H）に集中している[45]。当地が製鉄業に有利に働いた理由としては、ひとつには、原料となる鉄鉱石だけでなく、鉱石の溶解に使用する燃料としての樹木（木炭）が大量にあったことと、もうひとつ、市場としてのロンドンに近接していたことがある[46]。

16世紀初めになるとアシュダウン・フォレスト（Ashdown Forest）およびその周辺地域で製鉄業がおこなわれており、そこで小銃弾（bullets）を製造する者も現れた[47]。1521～40年の間に、製鉄業はこのアシュダウン・フォレストに加えて、北東部・南東部へと拡大する[48]。ケントとの境界線にあるフラント（Frant）（7I）では、ベイハム（Bayham）のプレモントレ修道院（Premonstratensian Abbey）のテナントとして、1525年にウィリアム・ウィバーン（William Wybarne）が鍛冶場（forge）を稼働させているとの記録がある。また1540年代には、ワイバーンのもとでフランス人が働いている。同じく1521年に同教区のブルックランド（Brookland）においてジョン・バーム（John Barham）が鍛冶場を稼働させており、1540年代にノルマンディー出身のフランス人がバームに雇用されている。こうしたフランス人職人はロザフィールド（Rotherfield）（6I）のような周辺教区に居住していた。1534年にニューブリッジ（Newbridge）の西側で新しい溶鉱炉（blast Furnace）が稼働している。アシュダウン・フォレストのスタムレット［Stumlet（Stimulet）］と呼ばれる王領地（Crown property）において、最初の賃貸（リース）がジョン・レヴェット（John Levett）に対してなされている[49]。

そこからさらに南東部に製鉄業は拡大し、1535年にはブライトリング（Brightling）教区（5J）のソックナーシュ（Socknersh）で溶鉱炉が稼働している。そこはジョン・コリングズ（John Collins）［バーウォッシュ（Burwash）（6J）］の土地であった。この周辺で溶鉱炉が検出される場所としては、パシュレー（Pashley）、ダーフォード（Darfold）、ロバーツブリッジ（Robertsbridge）、パニングエッジ（Panningaidge）があった。また鍛冶場は、エチナム（Echingham）、セイルハースト（Salehurst）にあった。またバクステッド（6I）においては、オールドランズ（Oldlands）とヘンダール（Hendall）で溶鉱炉が稼働していた[50]。

こうして見てくると、1540年代にサセックスの製鉄業に拡大への転機があるようだが、シュー

ベルト（Schubert）によれば、1543年にヘンリ8世が、戦争用の武器調達を目的として、当地の製鉄業を拡大させるように命じたようである。その際に、大砲や銃を製造するために技術者としてフランス人が雇用されている[51]。ヘンリ8世治世に森林の急速かつ組織的な開発が始まり、製鉄業の拡大とともに、人口増加も開始している[52]。

ところで、ちょうどこの時期の製鉄業については、代表的な製鉄業者シドニー（Sidney）家の会計文書が編纂されており、前半に編纂者の丁寧な解説がつけられている。そこから16世紀中葉以降の製鉄業の経営の実態を理解することができる。編者のクロスリーは、製鉄関連の基本用語の解説をしている。溶鉱炉（Blast Furnace）についての説明で、「16世紀の溶鉱炉は、約15フィート四方で高さは15～20フィートある。鉱石、木炭、ときに泥灰土（marl）、石灰岩（limestone）が上の先端から詰め込まれる。そして鉱石はシャフトと炉床（hearth）の中で鉄に変えられる。液化した鉄は炉床からでて、鋳型で鋳造される。溶鉱炉に風を送るふいご（bellows）は動力を水車から得ていた」とある。また鍛冶場（Forge）については、「この用語は錬鉄炉（bloomeries）の意味で使用されていた。そして16世紀になると、鍛冶屋の加熱炉をおもに意味することがあった[53]」とある。

サセックス西北部でハンプシャーとの州境にあるロウゲイト（Rogate）（6B）は、4,873エーカーの広域教区である。「1590年にハーベン（Haben）に鉄用鍛冶場（an iron hammer-mill）が、ハーティング・クーム（Harting Combe）に鉄用溶鉱炉（an iron furnace）があった。鉄製造に必要とされる樹林は、ハーティング・クームとニュー・ウッド（New Wood）の森林地にゆゆしく食い込んでいた[54]」とある。教区の北側は主として森林地だった。

ロウゲイトの北東に位置するファーナスト（Ferunhurst）（7C）は、「教区の大部分が森林であり、それが17～18世紀には製鉄所のための火を提供していた」といわれる。“Furnace Pond”、“Furnace Wood”、“Minepits Wood”のような言葉が残っている。1664年には、「破壊され明らかに1世紀以上そのままだった（‘ruined’ and apparently remained so for a century）[55]」との記載がある。1762～83年のthe American and French warsの時には、ジョン・バトラー（John Butler）が大砲鋳造のための製鉄場を復興させ、他の場所から労働者を雇用している。

ニュー・ショーラム（New Shoreham）（4F）は、サセックスの真南に位置し、海岸線に面した、耕作地をわずかしか持たない都市的教区である。ショーラムでは13世紀から14世紀初頭にかけて商人が羊毛輸出とワイン輸入を手がけていた。関税記録（the record of royal customs collected）の記載によれば、1560年代以降、輸出用貨物は、大部分、木材（厚板含む）、鉄、穀物、大麦、麦芽であり、輸入用貨物は、乾燥果実（dried fruit）、ワイン、諸製造品（manufactured goods）［石鹸（soap）、造船用資材（ピッチ、タール、錨、帆布、ロープ、麻）を含む］であった[56]。

1574年にセント・レオナルド・フォレスト（St. Leonard’s Forest）、セールハースト（Salehurst）（6K）、マウントフィールド（Mountfield）（5K）、バトル（Battle）（5K）間に、少なく見積もって、652件の鍛冶場と58基の熔鉱炉が存在していた。

製造された鉄は加工され、鍋（pots）、フライパン（pans）、かなとこ（anvils）、錨（anchors）、食器（plates）、差し錠（bolts）、分銅（weights）、やかん（kettles）などの製品となり、また棒鉄（bar-iron）からは、釘（nails）が製造された。この製鉄業の担い手には、ジェントリーもいたが、多数のヨーマン（自由土保有農）が農閑期を利用して自分の鍛冶炉を稼働させ、そうした日用品を製造していたのである。

ウィールドにおける銃（gun）や大砲（ordnance）の製造では、時代ごとの戦時需要を背景として、1760年代まで、ボーエン家（Bowen）、チャーチル家（Churchill）、クローリー家（Crowley）、イード・ウィルトン家、（Eade & Wilton）、フラー家（Fuller）、ハリソン家（Hariison）、ラビー家（Raby）などが、政府からの注文を受けて操業を続けていた[57]。

以上、サセックス・ウィールド地方の諸産業を紹介してきたが、このような簡単な概観からでも、16世紀後半から17世紀において、この一帯が、生活に密接な関わりを持つ諸工業の宝庫となっていたことが理解されたであろう。こうした地誌的背景の中で、宗教センサスの分析が意味をなすのである。

4．国教主義と非国教主義の伝統

A. 史　料

(1) 非国教徒を検出する基礎史料

王政復古以降のサセックスにおける非国教徒を検出する基礎史料は、かなり限定的である。まず、全体を概観し教区ごとの基礎文献を整理しているものでは、ウィリアムズ博士記念図書館（Dr Williams's Library）が編纂した *Nonconformist Congregations in Great Britain, A List of Histories and other Material in Dr Williams's Library*, Dr Williams's Trust, 1973 がある。本書はイングランドのみならず、ウェールズ、スコットランド、アイルランドも対象としている。サセックスについては、全体を外観するものとして、バックス（A.R.Bax）、カプラン（N.Caplan）、エルソン（F.G.Elson）、オーステン（E.Austen）の諸論文が挙げられている。また教区については、アランドル（Arundel）（5D）、バトル（5K）、ビリングハースト（6E）、ボグナァ・リージス（Bognor Regis）（4C）、ブライトン（Brighton）（4G）、チチェスター（Chichester）（4B）、クローリィ（Crawley）（7G）、ディッチリング（Ditchling）（5G）、イーストボーン（3I）、フィンドン（Findon）（5E）、ヘイスティングズ（4K）、ハイフィールズ（Highfields）（7H）、ホーシャム（Horsham）（7E）、ホウヴ（Hove）（4F）、リューウェス（Lewes）（4G）、リンドフィールド（Lindfield）（6G）、ニューヘイヴン（Newhaven）（3H）、ノージアム（5L）、ペタス（Petworth）（6D）、ロバーツブリッジ（Robertsbridge）（6K）、ターナーズ・ヒル（Turner's Hill）、ワイズバァ・グリーン（6D）についての文献・論文が紹介されている。

上記の教区の中で、ウィールドに位置するものを整理すると、バトル（ハイ・ウィールド東部）、

ビリングハースト（ロー・ウィールド西部）、クローリィ（両ウィールドの境界）、ヘイスティングズ（ハイ・ウィールド最東部）、ハイフィールド（ハイ・ウィールド東部）、ホールシャム（両ウィールドの境界）、リンドフィールド（ハイ・ウィールド中央）、ノージアム（ハイ・ウィールド）、ビリングハースト（ロー・ウィールド西部）、ペタス（ロー・ウィールド西部）、ロバーツブリッジ（ハイ・ウィールド東部）、ターナーズ・ヒル（ハイ・ウィールド中央）、ワイズバァ・グリーン（ロー・ウィールド西部）がある。また、ブライトン、イーストボーン、フィンドン、ホウヴ、ニューヘイヴンは、南部海岸に沿った諸村・諸都市である。

挙げられた地名は、特定地域に偏在する傾向があり、これが非国教徒の検出にも大きな意味を持つことは、後段で明らかになるだろう。

(2) 非国教徒検出に関する中村教授の史料批判

王政復古以降、17世紀後半の非国教徒に関する史料状況については、中村勝己慶應大学名誉教授の論文が参照されるべきである[58]。中村教授は、史料解説の基礎的典拠として G.L.Turner, *Original Records of Early Nonconformity under Persecution and Indulgence*, 3 Vols., London, 1911 を利用する（この史料は、大英図書館に所蔵されているが、ケンブリッジ大学図書館にはない貴重書である。幸いにして今ではインターネットを通じてダウンロードできる）。

ところで、中村教授によれば、この時期の非国教徒を検出するための史料は、少なくとも4種類残されており、それは以下の通りである。

①「非国教徒調査」(1665年)

本調査は、イングランド22の主教区（Diocese）中、ノリッジ、リンカン、エクセター、ブリストルの4主教区、およびウェールズ4主教区中、セント・デイヴィズ、セント・アザフの2主教区に関する報告書だけが、ランベス・パレス文書館（Lambeth Palace Library）に所蔵されている。サセックスはしかし、チチェスター主教区に属しており、本報告書は利用できない。

②「非国教徒集会調査」(Episcopal Returns)（1669年）

本調査は、「カンタベリー大主教ギルバート・シェルダンが非国教徒を弾圧する手がかりを得ようとして、非国教徒集会の数、その所在と教区、集会場提供者、教派または諸教派の名称、集会信者数とその構成（性別・年齢別・職業別および社会的身分別）、有力又はパトロン集会員名、および集会指導者の氏名についての各教区からの報告をもとにして」（中村論文からの引用）作成されたものである。各教区からの報告書を大執事（archdeacon）が取りまとめ、それを主教が整理し、大主教のもとに送り、ランベス・パレスで統一された形になったと思われる。本調査の中で、「リンコーン、ラットランド、ヘリフォード、ノーサンプトン、グロスター、ハンティンドン、オクスフォード、コンウォールなどの諸州に関する報告は全く欠けており」、また他州において主教がこの種の調査に関心を示さないところもあり、「報告はすこぶる不完全であった」。ただし、本調査を経済史の史料として用いるばあい便利なのは、対象が聖職者および一般信徒であり、「非国教徒の

社会経済的存在形態を知る」ことが可能な点である。チチェスター主教区については報告書が残されており、後段で利用する。

③「登録簿」(Entry Books)(1672年)

これは、「信教寛容宣言(Declaration of Indulgence)(信仰自由宣言－引用者)(新暦1672年3月15日)による非国教徒の集会許可と申請を記録したもの」(中村論文)である。集会場提供者数については全体数2,443人(100%)あり、内訳は、北部(Northern)[Northamberland、Durham、Cumberland、Westmorland、Yorkshire、Lancashire]—269人(11%)、北部ミドランド(North-Midland)[Cheshire、Derbyshire、Nottinghamshire、Linclnshire、Shropshire、Staffordshire、Leicestershire、Rutland]—461人(19%)、南部ミドランド(South-Midland)[Herefordshire、Worcestershire、Warwickshire、Northamptonshire、Gloucestershire、Oxfordshire、Buckinghamshire]—308人(12.6%)、東部(Eastern)[Huntingdonshire、Bedfordshire、Cambridgeshire、Hertfordshire、Norfolk、Suffolk、Essex]—404人(16.5%)、南東部(South-Eastern)[Berkshire、Middlesex、London、Kent、Surrey、Sussex、Hampshire]—437人(17.9%)、南西部(South-Western)[Wiltshire、Somersetshire、Dorsetshire、Devonshire、Cornwall]—564人(23%)となっており、集会数は、イングランド南西部・南東部で最も多かった。

クーパーによると、サセックスについては、1672年4月13日から12月9日まで26件の応募があり、申請場所は38ヵ所報告されている(表1参照)。

④「コンプトン・センサス」(1676年)

1660年代から70年代初めにかけて非国教徒弾圧に失敗し、むしろ彼らが増加したとの批判がでた後で、それをかわすために、非国教徒とカトリックの現状を調べる目的からカンタベリー大主教ギルバート・シェルダンがロンドン主教ヘンリー・コンプトンに命じて作成させたのが、本調査である[59]。このセンサスに記載を求められたのは、各教区の住民数(コンフォーミスト)、カトリック教徒数および非国教徒数(ノンコンフォーミスト)の3項目である。

「コンプトン・センサス」はこの時期の宗教センサスとしては最大規模のものである。しかし、中村教授によれば、利用するにあたり、以下のような限界がある。(a)まず「16歳以下の子どもは除外した」とあるが、調査対象が奉公人を除く16歳以上の住民なのかどうか、また男女の性別についても不明であり、実際には教区ごとにまちまちであった。そのために人口統計として利用するには限界がある。これについては、クーパーが概数(round numbers)という表現で「ホーシャムとロザフィールドは各々人口3,000人、ブライトン2,000人、チチェスター、メイフィールド、ペタスが各々1,200人、クックフィールドとイースト・グリンステッドが800人になっている[60]」と指摘する。すなわち、正確を期した人口統計ならば、概数はあり得ないのである。(b)つぎに、非国教徒(separatists,dissenters,sectaries,nonconformists)は国教会礼拝を頑強に強く拒否するか、欠席する者を対象としているが、迫害を避けるために、表向き国教徒を装う「便宜的国教徒」(occasional conformists)が国教徒(conformists)として扱われている。(c)またクエーカーやバプテ

表1 「信教寛容宣言」(1672年) に基づく集会申請 (サセックス)

	教区 (位置)	申請日時 1672年	申請者	集会場所
1	Arlington (4I)	無記載	John Beaton (Presbyterian)	House of Thos. Lees
2	Arundel (5D)	5月8日	Samuel Murner (Congregationalist)	House of Thomas Waterfield House of Henry Wolgar
3	Balcome (7G)	6月10日	William Mills (Congregational man)	Nynian Tasker's House
4	Balcome (7G)	無記載	Richard Turner (Congregationalist)	Alexander Brydges' House
5	Brightling (5J)	4月13日	Joseph Bennett (Presbyterian teacher)	自宅
6	Burwash (6J)	4月30日	Thomas Goolham (Presbyterian)	自宅
7	Chichester (4B)	5月2日	John Corbrt (Presbyterian)	無記載
8	Chichester (4B)	5月8日	William Fletcher と Mr. Upton (Anabaptists)	Fletcher の自宅
9	Chichester (4B)	6月10日	John Willie (Congregationalist)	自宅
10	East Dean (5C)	4月19日	William Wallace (Presbyterian)	自宅
11	Eastden	無記載	Richard Key	自宅
12	East Grisntead (7H)	5月13日	Christopher Snell (Presbyterian)	自宅
13	East Grisntead (7H)	5月13日	Stephen Martin (Presbyterian)	許可された場所 (any allowed place)
14	Hartfield (7H)	無記載	John Elliott (Presbyterian)	自宅
15	Funtington (5B)	無記載	Elizabeth Bridger	House of Elizabeth Bridger
16	Hellingly (4I)	12月	Samuel Burton (Presbyterian)	自宅
17	West Hoathly (7G)	無記載	Christ.Snell (Presbyterian)	House of Mary Frankner (Faulkner?)
18	Horsham (7E)	4月16日	Matthew woodman (Presbyterian)	自宅
19	Horsted Parva (6G)	5月25日	Will.Peckam	自宅
20	Hove (How) (4F)	5月8日	William Wallace (Presbyterian)	House of Sir John Stapley
21	Kingston (4G)	4月30日	William Martaine (Presbyterian)	House of John Oglander
22	Lewes (4G)	無記載	Edward Newton、他7人 (Presbyterian)	Willl.Harris' House

23	Lewes（4G）	5月7日	Stephen Ford John Lover （両者 Congregational）	Back Houseof Thomas Fissen-den 自宅
24	Lindfield（6G）	10月28日	Edward Lullam（Presbyterian）	House called Kenwards
25	Lugashall（7C）	11月18日	Richard Lander（Presbyterian）	自宅
26	Midhurst（6B）	5月8日	RicharGarrett（Congregational）	House of Nicholas Brewer（clothier）
27	Mountfield（5K）	10月8日	Thomas Martin（Baptist）	House of Richar Spencer
28	Preston（4G）	5月25日	James Bricknoll	許可された場所 （any allowed place）
29	Pagham（4B）	無記載	John Hall Robert Walker	各々の自宅
30	Sedlscombe（5K）	4月13日	Edmund Thorpe（Presbyterian）	自宅
31	Shipley（6E）	5月1日	John Buckley（Presbyterian）	House of John Prior, Goring Lee
32	New Shoreham（4F）	5月25日	John Jeffrey	自宅
33	Waldron（5I）	12月9日	John Stoner（Presbyterian）	House of Nicholas Winton
34	Westgate（不明）	6月10日	Peter Le Gay（Congregationalist）	自宅
35	Westgate（不明）	6月10日	John Abbot（Congregationalist）	無記載
36	Westmeston（5G）	無記載	Stephen Ridge	自宅
37	Wivelsfield（6G）	10月28日	Thomas Hallett （Congregationalist）	Thomas Hurst's House
38	Brighton（4G）	5月8日	Joseph Osbourn（Independent）	House of John Fryland（Presbyterian）

（出所） J.H.Cooper, Return of Conventicles in Sussex, 1669, and King Charles' Liences for Nonconformists, 1672, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.51, 1908, pp.7–13.
（注） 位置は図1の記号を参照。

ストは一般的にイングランド教会と断絶しているが、長老派や会衆派の信徒は、教会統治の仕方で違いはあるものの、心情的にはイングランド教会と断絶していない。以上の理由から、全体的に非国教徒が実際よりも、少なく見積もられる傾向がある。

(3) 非国教徒関連の法令

王政復古後の非国教徒関連の法令では、クラレンドン法典と呼ばれる4つの法律が重要である。

① 1661年12月「自治体法」（the Corporation Act）が制定された。内容は、自治体の役職（municipal office）につこうとする者は「厳粛な同盟と契約」（the Covenant）を放棄し、国王への服従

(non-resistance) を誓約し、イングランド教会の儀式に則りサクラメントにあずかる、とするものである。これは、主として長老派や共和主義者を公職から追放するのを目的とした法律である。

② 1662年に「礼拝統一法」(the Uniformity Act) が制定された。この法令により、1662年8月24日聖バーソロミュー祭以降、聖職者は改定された公共祈祷書 (The Book of Common Prayer) を使用すべきことになり、これを甘受せず服従を拒んだ約2,000人の牧師は職から追放されることとなった。

③ 1664年に「第一次秘密集会禁止法」(First Conventicle Act) が制定された。この法令は、「16歳以上のものがその家の家族を除いて5名以上集まり、国教会の定めに従わない家庭集会をひらくことを禁止し、初犯は3ヶ月の投獄または5ポンド以下の罰金、犯行を3回くりかえすと流刑という厳罰を科した」(浜林正夫教授) ものであった。これは、追放された聖職者が無許可の集会で説教するのを妨害するのを意図したものだった。

④ 1665年にクラレンドン法典の四番目の法令「五マイル法」(Five Mile Act) が制定された。この法令は、追放された牧師が自治都市 (city,borough,corporatetown) および過去に在任した場所・教区の5マイル以内に来ることを禁じ、同時にイングランド教会に属さない者が学校で教えることを禁止するものであった。

以上のように、非国教徒を押さえ込むための法令が中央から出されているが、サセックスにおいてはどのような状況だったのだろうか。

B. サセックスにおける「非国教徒集会調査」(Episcopal Returns) (1669年) の分析 (表2参照)

(1)「非国教徒集会調査」の分析結果

表2は「非国教徒集会調査」(1669年) を筆者が整理し直したものである。この表2に基づくと、以下のことが判明する。

①表2の申請場所を教区ごとに色塗りした図3から見て取れるように、ウィールドおよび南部沿岸地域の教区を中心に非国教徒の集会の存在を確認できる。

②教派は49検出され、内訳は再洗礼派 (Anabaptists) —11、長老派 (presbyterians) —3、クエーカー (Qukakers) —6、独立派 (Independents) —2、再洗礼派およびクエーカー (Anabaptists & Quakers) —1、長老派および独立派 (presbyterians & Independents) —1、ローマカトリック (papists) —1、不明—24となっていた[61]。

③社会的身分は、原文のまま引用すると、"of middle sort"、"inferior people"、"poor people"、"meane for the moste parte"、"of all sorts under the degree of a gentl (eman)" などの表現が目立つことから、当時の中下層の人びとが信徒であったのだろう[62]。"Yeomen & Labourers" との記載もあり、彼らは職人的工業に従事していたと考えられる。但し、ステッダム (Stedham) (6B) では"some of the gentry", ウェストメストン (Westmeston) (5G) では "many of good estate"、ワーティリング (Wartling) (4J) では "Many persons of considerable estates"

表 2 「非国教徒集会調査」(Episcopal Returns)(1669 年)

Episoplal Returns, 1669 Diocesse of Chichester (チチェスター主教区)					
Parishes & Conventicles in them	教派 (Sects.)	信徒数 (Numbers.)	身分 (Quality.)	指導者 (Heads & Teachers.)	位置
Nidhurst Deanry. (執事管区)					
Woolbedding (0－集会数)					6B
Graffam (0)					6C
Biston (0)					?
Harting (0)					6B
Elsted (0)					6B
Treford cum Didling (0)					6B
Easebourne (0)					6C
Fittleworth (0)					6D
Burton cum Cote (0)					6D
Barlavington (0)					5C
Petworth (0)		50 or 60	Some Middle sort others inferior.	Mr Henry Staples, one Reves & one Willmott.	6D
Tillington (0)					6C
Lurgisale (1)					7C
At the houses of John Hooke & Richard Launder		about 40	Yeomen & Labourers.	Mr Kemes & others whose names are unknowne	
Stedham.					6B
At the houses of Richard Smyth of Bridgefoot		Sometimes 200.	Some of the gentry	Mr Richard Garrett, Mr Staples	
Bignor (0)					5C
Haughton (0)					5D
Norminghurst (0)					?
Wollavington (0)					6C
Arndell Deanry					
Barnham (0)					4C
Forlington (0)					4I
South Stoake (0)					5D
Amberley (0)					5D
Walberton (0)					5J
Bisnsted (0)					4C
Ferring (0)					4D
Burpham (0)					5D
North Stoke (0)					5D
Poling (0)					4D
Bury (0)					5D
Middleton (0)					4C

Phelpham (0)					5D
Yapton.		about 6.	of ordinary ranke.	John Lutter.	4C
Arndell (3)	Presbyterians.	about 40.	meane persons.	Samuel Wilmore.	5D
	Quakers.			Mr Stapler.	
	Anabaptists.	few.		Mr Fish, Mr Wilson.	
Angmering (0)					4D
Leominster (0)					?
Bexgrave als Besgrave Deanry.					
Birdham (2)					4B
at the house of Willm Atwell	Anabaptists.	About 30.	Infrerior people.	One Cloyton & others	
at the house of Richard Greene	Quakers.	20 or 30.	meane.	unknowne	
Aldingbourne (0)					4C
Stoughton (0)					5A
Compton cum Upmarden (0)					5A
East marden (0)					5B
Northmarden (0)					5B
Fishbourne (0)					
Sidelsham (1)				Thomas Willmore & Wiilm Vonsdeane	4B
Lewys Deanry.					
West Firles (0)					4H
Twyneham (1)					5F
at the house of James Wood	Anabaptists & Quakers.	about 40.	meane for the most part.	Mitchael Martyn & others unknowne.	
Warsfeild (1)					?
at the houses of Walter Norman & Edward Gerrand.	Quakers.				
Pateham (0)					
Blechington (0)					
Arlington (0)					4I
Clayton cum Cap:de Kemer (0)					5G
Bolney (0)					6F
Barcomb (1)				Thomas Chroucher.	5H
Ditching (2)	Anabaptists.	About 10.	midle sort.	unknowne.	5G
	Presbyterians.	About 8.	midle sort.	Mr Lulham.	
Beeding als Seale (1)	Quakers.	Seldome fewer than 200.		Strangers unknowne	?
at the house of Thomas Parson living at Peppergate.					
Poynings (0)					5F
Plumpton.					5G

at the house of Mr Turner, a Nonconformist minister.		about 200.	Of all sorts under the degree of a Gent.	The said Mr Turner	
Newtimber (0)					5F
East Grinstead.	Papists.	About 16.			7H
at the house of Mr Christopher Snell.	Independents.	20 or 30		Mr Christopher Snell	
at the house of James Woodman	Anabaptists & Quakers.	About 30.		Thomas Turner a Chirugeon.	
Cowfold (0)					6F
Crawley (0)					7G
Erthingley (0)					?
Balcomb (1)	Anabaptists.	seven or eight familyes.	Tradesmen & Labourers.		7G
Cookfield (0)					6G
Newicke (0)					5H
Chailey (0)					5G
Westmeston cum Cap:de Pilkington		about 200	many of good estate.	Richard Turner,Thomas	
at a house called Blackbrooke.				Hallett, Edward Lullham, John Earle	
Slaugham (1)					6F
at the house of Thomas Parsons	Quakers.			Unknowne.	
Albourne (0)					5F
Henfeild (0)					5F
Meeching (0)					?
Southeese (0)					?
Radmill (0)					?
Telsecombe (0)					4G
Falmer (0)					4G
Preston cum Hove (0)					4G
Brighthelmestone (1)					4G
at the houses of William Beard & Henry Smyth		about 200		Mr Newton, Mr Earle, Mr Samuel Witmer, Mr Lover, Mr Fish, Mr Everdon, Mr Turner, Mr Hallett.	
Pevensey Deanry					
Tarringnewell (0)					4H
Laughton (0)					5H
Pevensey (0)					4J
Blechington (0)					?
Hailsham (1)					4I
at the house of John Lover		about 40	most meanest sort of people.	the said John Lover.	
Chittingley (0)					5I

Selmeston (0)					4I
Alciston (0)					4H
Litle Horstead (0)					5H
Ripe (0)					4I
Rotherfeild (0)					6I
Frant (0)					7I
Berwick (0)					4I
Allfriston (2)	Quakers,	3 or 4 families besides strangers			4H
	Anabaptists.				
Sterringten Deanry					
Ashurst (0)					5E
Thakeham (1)		20 or 30.	poore people.	Samuel Wilmore, JohnBeaton, Mr Stapler, Mr Wilson	5E
Combs (0)					4E
Bramber (0)					5E
Buttolphs (0)					4E
Findon (0)					5E
Itchingfold. Noe Conventicles. But Several that never come to Church					6E
Ashington cum Buncton (0)					5E
Rudgeweeke (0)					7E
Billingshurst (0)					6E
West Greensted (0)					6E
Pullborough (0)					6D
Horsham (0)					7E
Washington (0)					5E
Stormington (1)		20 or 30.	poore people.	Samuel Wilmer.	5D
Dallington Deanry.					
St.Clements in Hastings (0)					4K
Oare (0)					4L
Castle Parish (1)					?
at the house of John Thorpe.		40 or 50		One Thomas Bennett	
Brede (0)					5L
Fairlight (0)					4L
Beckley (1)					5L
at a house called Farme where Abraham Feaver dewlls.				One Hammond &one Bennett.	
Udimer (0)					5L
Peasemarsh (1)					5L

at the house of Thomas Mococke.		50 or 60. sometimes 100.		Thomas Bennett of Rolvenden in Kent.	
Warbleton (2)					5J
at the houses of John Ellis & of Thomas Soare.	Quakers of the other sects.				
Nenfeils (1)					4J
In an Empty house.				Mr Earle & Mr Vousden Nonconf. Ministers.	
Burwash (0)					6J
Catsfeild (0)					5K
Herstmonceane (1)					4J
at the house of Joane Syllis, a poore woman, once a month.	Anabaptists.				
Wartling (1)					4J
every Sunday.		Many persons of considerable estates.			
Dallington (0)					5J
Heathfield (1)	Anabaptists.				5J
at the house of widow Grover.					
Growhurst (1)					?
at the house of Richard Yeeling.	Anabaptists.			The said Richard Yeeling & others.	
Sidlescomb als Solscomb (1)					5K
At Thomas Frencham's house, & at the hous of Edmund Thorpe.					
Salehurst (1)		unknowne.			6K
At the house of Willm Steede of Robtsbridge					
Westfeild (1)	Anabaptists.				5K
at the houses of Josep Stoneham & Rich:Coulstock & Francis Longley.					
Peculiars of Canterbury					
South-Mawling (1)	Presbyterians.	At least 500.	midle sort.		4H
All-Sta in Lewys (1)	Independents.	numerous.	midle sort.		4G
Lindfeild. Noe conventicles, although many factious persons live there.					6G
Cliffe (1)		60	midle sort.		4G
Clapham (0)					4E

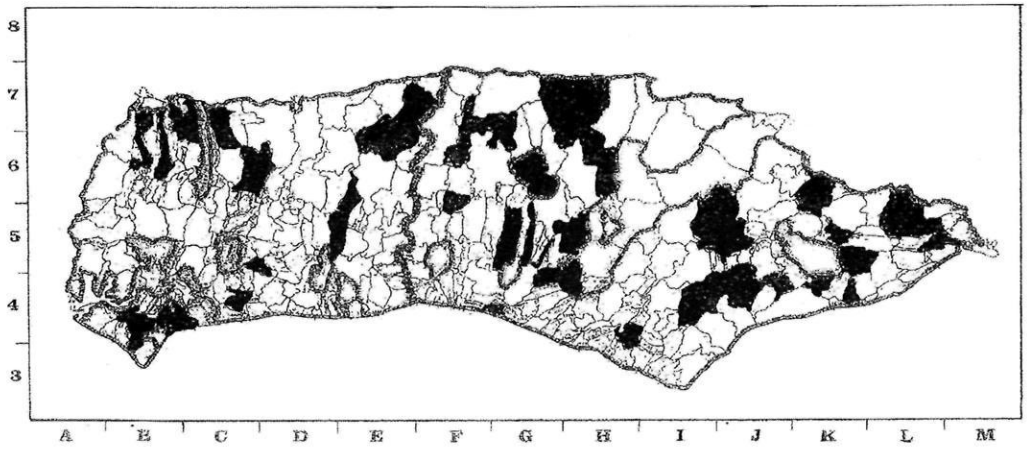
Patching（0）					4D
Isfeild（0）					5H
Ringmer（0）					5H
Tangmer（0）					4C
East Lavan（0）					5B
Terring（0）					4H
Pagham（1）		20 or 30		Thomas Willmer-ejected thence for Nonconformity	4B
Hastings Deanry					
Rye（1）					5M
at the house of Samuel Joake.		100			
Allsts in Hastings（0）					4K
St.Thomas of Winchelsea（0）					5L
Icklesham（0）					5L
Bexhill（0）					4K
Pett（0）					4L
Midburst Deanry.					
Lodgsworth（0）					6C
Stedham（1）					6B
Trotham（1）					?
Farnhurst（1）					7C
Trotton cum Tuxlith（2）					7B
at the house of Anthony White yeom.	Anabaptists.	from 50 to 100.		Joseph Varden.	
at the houses of Arthur Bettesworth, Joseph Varnden, & Clement Loveder.	Presbiterians & Independents	from 50 to 100.		Mr Garrett, Mr Rowell	
Midhurs（1）					6B
at the houses of Robers Marner & Nicholas Brewer		great numbers.	Some of them , Persons of good Quallity.	Mr Samuel Marner, Mr Richard Garrett, Mr Staples, & the two Brothers, Mr Thomas & Mr Willmott.	
Heyshottt（0）					6C
Frnhurstt（1）					7C
at the house of Roger Shotters		near 200.	midle ranke.		
Eastergatet（0）					4C

（出所）　G. L yonn Turner, *Original Records of Early Nonconformity under Persecution and Indulgence*, London, 1911, Vol.1, pp.27-34.

（注）　1. 記載（スペル）は、可能な限り原史料のままにしてある。

2. 位置の記載は図1に基づくが、確定できない教区は疑問符（？）にしてある。

図3　サセックスにおける非国教徒の分布図（1669年）



（出所）　表2を元に非国教徒の集会が存在した教区を黒く色づけした。ただし位置の確定しない数教区は対象外とした。

とあり、またミッドハースト（Midhurst）（6B・6C）では“Some of them Persons of good Quality”とあるから、中にはかなり上層の人びとも、非国教徒として存在したと推定される。

ところで、内戦期以前までのピューリタンは主として、イングランド教会内部の非信従者であり、1630年代に彼らが分離して、カトリック化した国教会に抵抗したのであったが、貴族、ジェントリーも積極的に参加するものであった。これが1660年、王政復古以降においては、ピューリタニズムの伝統が体制側の宗教から外され、諸派に受け継がれていき、それと共に、一部の集会指導者は別として、社会の中下層の人びとが信徒として表に出て、貴族、ジェントリーは後退していくといわれる。

また、ピューリタニズムを厳密に定義する現在のイングランド教会史と、ヴェーバーのように広く禁欲的プロテスタンティズムを〈ピューリタニズム〉に含める場合とでは、対象の範囲が違ってくる。そこが議論の混乱にもつながっているので、注意すべきだろう。

(2) ブレントの分析

これと関連し、1663年から86年までのリューウェス（Lewes）の非国教徒について、サセックスの地方史家ブレント（Colin Brent）が詳細な論文を書いている。表1に示されるように、1669年の「非国教徒集会調査」では、例えば、All-Sta in Lewysについて、独立派（independents）の数は多数（numerous）、身分（quality）は中産層（“midle sort”）（原文ママ）となっているが、ブレントの分析によれば、独立派だけでなく、長老派、クエーカー、アナバプテストの集会もあり、多種の教派が存在した[63]。

またブレントは以下のようにも記す。「リューウェスの非国教徒の回復力（resilience）は、単な

る数の問題や同情的なコンフォーミストとの協力の問題以上の事柄であった。彼らは、経済的な活力と社会的な重要性を享受し、トーリーのシンパ（partisans）の拠点である酒類の取引を除いて、都市の商業的生活のあらゆる部門に浸透した。彼らは特に繊維・衣料の製造販売に引きつけられた。すなわち、1663年から1686年に、剪断工（shearmen）、織布工（weavers）、フェルト帽製造工（feltmakers）、染色工（dyers）、仕立屋（tailors）、靴下製造工（hosiers）、帽子製造業者（hatmakers）、手袋製造人（glovers）、カラー製造業者（collarmakers）—30人、反物業者（drapers）、雑貨小間物商人（harberdashers）—24人、靴職人（cordwainers、shoemakers）—15人が居住していた。199人の非国教徒（男性）中、彼らはその3分の1を占めた[64]」。

さらに諸教派の中心的担い手を当時のパンフレットなどに記載された同時代人の用語を使用して、“the middle sort”、“the hottest, peaceable and industrial people”、すなわち、わが国の経済史学の言葉を使えば、中産的生産者層で代表させている。リューウェスは、内戦時に議会派につく者が多く、マニング（Brian Maning）は、「都市民および州出身の300～400人が議会派のために立ち上がった[65]」と記す。ただし、反対に、そうした職業についていたからといって、彼らが非国教徒であるとは限らない。逆のことは必ずしも言えないので、この点は注意する必要がある。

また、その後のリューウェスの宗教史を詳細に位置づけたゴーリング（Jeremy Goring）の研究書を読むと、体制側の宗教としてのイングランド教会と、それに服従するのを潔しとしない非国教徒との軋轢（ときに「協調」的関係）が、同市の政治的・政党的分裂を引き起こしている。簡潔にいえば、イングランド教会（チャーチ）対非国教徒（チャペル）という、宗教的＝政治的対立の構図が形成されていたのである[66]。

(3) レスターの説

リューウェスのクエーカーについては、レクター（W.K.Rector）が論文を書いている[67]。1652年春に、クエーカーの創立者ジョージ・フォックス（George Fox）はランカシャー、ヨークシャー、ウエストモーランドで信徒を獲得する。1654年頃、イングランド南部においても宣教を拡大する。ジョン・リー（John Lee）とトマス・ローソン（Thomas Lawson）がサセックスで宣教を開始するが、かつてコモンウエルスの兵士であり、クエーカー信仰故に4回投獄された経験を持つトマス・ローコック（Thomas Lawcock）がこれに加わり、1655年にホーシャム（7E）で宣教を始める。ホーシャムから2マイル南にあるナトハースト（Nuthurst）に移動し、日曜日にブライアン・ウイルカーソン（BryanWilkason）宅で集会が持たれる。その翌週には、アイフィールド（Ifield）（7F）の織布工リチャード・バックス（Richard Bax）宅でも集会が持たれる。同じ頃、シーカーズ（Seekers）の一団が、リューウェスのサウスオーヴァー（Southover）にあるジョン・ラッセル（John Russell）宅で集会を開催する。

1668年頃までにサセックスのクエーカーの動きは弾みがつき、同年10月9日、サセックスのGeneral Meeting of the Friends of Truthが持たれた。開催場所は、サリー州ケイペル（Capel）の

リチャード・バックス宅であった。リューウェスで最初の月会（Monthly Meeting）が開催されたのは、11月26日、キンググストン（Kingston）のジョン・ウェンハム（John Wenham）宅だった。1675年までリューウェスのクエーカーはあちこちの個人宅で集会を維持し、既存の集会所を持たなかったといわれる。

C. サセックスにおける「コンプトン・センサス」（1676年）の分析

まず表3を全体的に見たときに、表向き、53,271人と圧倒的多数を占めるのがコンフォーミスト、すなわちイングランド教会の会員であったことを確認しておこう。その中でも、ノンコンフォーミスト（非国教徒）が、表向き出現しない教区があり、西部の端の教区、ウェスト・トーニー（West-Torney）（4A）、ウェストボーン（Westbourne）（5A）、ラクトン（Rackton）（5A）、ストウトン（Stoughton）（5A）、コムトン（Compton）（5A）、ウェスト・ディーン（Westdeane）（5B）を初めとし、西南部沿岸地域（4B）を除いて、5B、5C、5Dといった地域が、それに該当した。西南部の穀作地帯は、非国教徒が出にくい環境があったと推定されるのである。当地域は、閉鎖型教区が主流を占める場所であった。

サセックス内戦期の研究で著名なフレッチャー（A.J.Fletcher）は、以下のように指摘する。「17世紀に至るまで、ピューリタニズムは、州の西側よりも東側においてはるかに強かった。ウィールドは、プロテスタンティズムが最も急速かつ堅実に定着した、イングランドの諸地域の一つだった」、「ピューリタニズムの遺産は、1670年代に多くの諸都市および諸村落で定着した非国教徒の集会（well-established Dissenting congregations）の中に明らかである。1676年の宗教センサスを取り上げたときに、全体で2,452人（表3では2,453人－引用者）の非国教徒を数えた。ブライトン（Brighton）（4G－引用者、以下同様）やリューウェス（Lewes）（4G）は非国教徒の中心地だった」。さらにまた、「ディッチリング（Ditchling）（5G）、ブライトリング（Brightling）（5J）、ボールカム（Balcombe）（7G）、ラーガシャル（Lurgashall）（7C）、シドルサム（Sidleham）（4B）は、堅い非国教徒の集団を有した。イースト・グリンステッド（East Grinstead）（7H）とホーシャム（Horsham）（7E）は許可を受けた長老派の集会場（meeting places）を、アランドル（Arundel）（5D）とミッドハースト（Midhurst）（6B）は会衆派の集会場を有していた。ピューリタンの情熱は和らげられていたが、初期の世代が教え込んだ独立心と批判精神は破壊されていなかった[68]」とも記す。

フレッチャーの指摘にもあるように、王政復古以降のサセックスにおいて、ピューリタニズムの伝統は消滅することなく、特定地域に連続する形で、非国教主義の諸派に受け継がれていく。特にリューウェス（4G）は16世紀においては、フランドル地方とフランスから逃れたプロテスタント信徒の移住やメアリー女王時代の17人の異端処刑などから、伝統的に、急進的な神学思想の影響を被った都市であった。コンプトン・センサスにおいては、リューウェスは971人の内180人（約18.5%）が非国教徒だった。1727年のボワー主教（Bishop Bower）の巡察では、5教区324家族中、

表3　コンプトン・センサス（1676年）の集計

チチェスター主教区（Diocese of Chichester）				
教区（parishes）	コンフォーミスト（Conformists）	パピスト（Papists）	ノンコンフォーミスト（nonconformists）	位置
チチェスター大執事管区（Archdeaconry of Chichester）				
Bepton	65		2	6B
Barlavington	40			5C
Bignor cum Buddington	67			5C
Bodecton cum Coutes（Burton with Coates－編者）	24	6		5C
Coldwaltham	102			5D(L)
Easbourne	120	40		6C
Kirdford	462		5	6D
Iping cum Chithurst	103		8	6B
Cocking	136			6B
Duncton	60			5C
Egdeane	18			6D
Elsted	76			6B
Farnhurst（Fernhurst－筆者）	227	2	4	7C
Graffam	109			6C
Harting	332	23	5	6B
Fittleworth	147	1	2	6D
Hardham	36			5D
Heyshot	126			6C
Lodeworth	175			6C
Linchmore	73		1	7C
Lurgashall	160	2	27	7C
Midhurst	341	56	50	6B
Rogate	166	2		6B
Petworth	1,178	2	20	6D
Northchappell	176			7C
Stedham	100	4	4	6B
Stopham	49		1	6D
Sutton	120			5C
Tillington	400			6C
Treford cum Didling	68			6B
Turwick	12			6B
Trotton	145	2	3	7B
Woolbeeding	100			6B
Woollavington	98		2	6C
Yapton	116		6	4C
Walberton	54		1	4C
Binsted	21			4C

Tortington	30			4D
Southstoke	30		3	5D
Northstoke	37			5D
Poling	65			4D
Rustington	103			4D
Midleton	16			4C
Madehurst	39		5	5C
Felpham	141		1	4C
Ferring				4D
Kingston	132			4D
Preston				4G
Liminster	164			7C
Climping	98			4D
Houghton	58			5D
Ford	19			4D
Eastergate	54	1	5	4C
Clapham	96	14		4E
Hampton parva（Littlehampton－編者）	77			4D
Bury	178			5D
Burpham	106			5D
Angmering	180		5	4D
Amberly	170			5D
Arundell	346	4	50	5D
Ashington cum Buncton	67		6	5E
Billingshurst	294		6	6E
Broadwater cum Woorden	200			4E
Goring	140			4E
Bramber	72			5E
Combers	24			4E
Buttolphs	45			4E
Chiltington（West Chiltington－編者）	291		9	6E
Gretham	47			5D
Itching field	198		2	6E
Launsing	350		4	4E
Findon	116			5E
Horsham	2,870	30	100	7E
Nuthurst	129		21	6F
Pulborough	699		1	6D
Parham	29	1		5D
Rudgwick	785		15	7E
Stenning	290		10	5E
Rusper	152		16	7F
Sompting	128			4E

Shipley	540	40	20	6E
Storrington	388		12	5D
Sullington	85		5	5E
Wisborough green	355			6D
Washington	320			5E
Thakesham	230		20	5E
Wiggenholt	39		1	5D
Worminghurst	41			5E
Wiston	60		4	5E
Aldingborne	326	2		4C
Boxgrave（Boxgrove－筆者）	225	8		5C
Bosham	300			4B
Birdgam	77		10	4B
Chidham	71		5	4B
Donnington	56		2	4B
Eastwittering	42		10	4B
Ernly cum Almodington	26		9	4B
Eastdeane	115		5	5C
Eastmardon	54			5B
Funtington	239	1		5B
Eartham	107	2		5C
Hunston	45		7	4B
Compton	70			5A
Upmardon（Up Marden－編者）	128	12		5B
Northmardon	26			5B
Mid Lavant	70			5B
Merston	40	5		4C
Oving	161		1	4C
Ruckton	40			5A
Sidlesham	198		35	4B
Selsey	266		3	3B
Singleton & Charleton	251	1	15	5C
Stoughton	47	3		5A
Upwaltham	17			5C
Westhampnet	85			5C
Westichenor	31		1	4B
Westoke	39		4	5B
West-Torney	48			4A
Westwittering	108		12	4A
Selham				6C
Ashurst				5E
Barnham				4C
Warningcamp				4D

Slinford				7E
Warnham				7E
Westgrinsted				6E
Appledrum	36			4B
Binderton				5B
Northmundham	83		12	4B
Westbourne				5A
Westdeane				5B
Linch				7B
Tuxlith				7B
リューウェス大執事管区(Archdeaconry of Lewes)				
Allbourne	97		3	5F
Alleiston（Alciston－編者）	64		1	4H
Arlington	207		4	4I
Allfriston	120		21	4H
Balcombe	175		29	7G
Brighthelmston（Brighton－編者）	1,740		260	4G
Beeding alias Seale	206			5F
Berwick	66		4	4I
Bletchington	61			3H
Bishopstone	39		6	3H
Bedingham	122		1	4H
Barcombe	296		4	5H
Bolney	212	1	7	6F
Crawley	67		3	7G
Chillington（East Chiltington－編者）	78		2	3I
Chuley（Chailey－編者）	316		4	5G
Clayton	108		4	5G
Chaunton（Chalvington－編者）	66			4I
Cowfold	292		8	6F
Cockfeild	800			6G
Chittingly	216		4	5I
Westdeane	30		1	3I
Eastdeane	81		2	3I
Eastbourne	420			3I
Denton	32			4H
Friston	35			3I
Fokington（Folkington－筆者）	70	1		4I
Fletching	443		7	6H
Falmer	50			4G
Frunt（Frant－筆者）	190	10		7I
Eastgrinsted	767	5	28	7H

Hoove	57		1	4F
Hangleton	26		1	4F
Hellingly	184		16	4I
Easthoathly	100			5I
Westhoadly	298		2	7G
Littlehorsted	48		2	5H
Haylsham	278		22	4I
Hamsey	123		4	5H
Hendieild	395		5	5J
Hartfeild	314		22	7H
Harsted Laynes（Horsted Keynes－編者）	246		4	6G
Hurstpoint	271		22	5F
Iford	64		9	4G
Ifeild	110		40	7F
Jevington	122			3I
Keymer	144		24	5G
Kingston juxta Lewes	73		7	4G
Kingston-Bowsey	31			4G
St. Michael in Lewes	251		67	4G
South: Over. In Lewes	43		24	4G
All Saints in Lewes	237		23	4G
St.Johns in Lewes	96		32	4G
St.Mary Westout in Lewes	60		27	4G
Lullington	14		6	4I
Littleington	45		6	3I
Laughton	197	1	2	5H
Meeching alias Newhaven	95		5	3H
Newick	133		7	5H
Newtimber	47			5F
Patcham	97		3	4G
Bletchington	4		6	?
Portslade	91		2	4F
Preston	64		1	4G
Pevensey	52		3	4J
Poyning	52			5F
Plumpton	78		12	5G
Pedinghoe	66			4H
Pycombe	52			5F
Retherfeild（Rotherfield－筆者）	2,992	2	6	6I
New Shoreham	500			4F
Radmell	93		7	4H
Ripe	118		2	4I
Old Shoreham	73		1	4F

Southheighton	28			4H
Street	62		12	5G
Selmeston	67		5	4I
Shermanbury	110			5F
Seaford	192		10	3H
Southweek	63		1	4F
Southweese	49			4G
Slangham	193		7	6F
Twyneham	71		9	5F
Tarring Nevill	29			4H
Telscombe	26		2	4G
Westminston	80		10	5G
Worth	264	16	20	7G
Willingtdon	150		5	3I
Willmington	56		4	4I
Westfirle	107	43	2	4H
Wivelsfeild	82		18	6G
Westham	140	2	8	4J
Withyham	143			7I
Waldron	237		3	5I
Woodmancoate	74		6	5F
Marisfeild	284		20	6H
Ardingly	114		6	6G
All Saints in Hasting	358		5	4K
Brede	213		2	5L
Ewhurst	194		6	5K
East-Guilford	35			7H
Fureleigh（Fairlight－編者）	65	5		4L
Bodyham	84		2	6K
Ashburnham	87	1	6	5J
Brightling	210		20	5J
Bexhill	300			4K
Beckley	225		10	5L
Dallington	180	2	8	5J
Burwash	947		3	6J
Catsfeild	80			5K
Crowhurst	84			4K
Grestling	109		8	4L
St.Clements in Hasting	690		20	4K
Hooe	105		3	4J
Heathfeild	390		10	5J
Horsmounsex	253		5	4J
Hollington	70			4K

Ickkesham	84		3	5L
Itchingham（Etchingham－編者）	104		2	6K
Iden	91			5M
Mountfeild	107		13	5K
Northyham	196		10	5L
Nonfeild	151			4J
Oars（Oare－筆者）	59	5		4L
Penhurst	42			5J
Pett	49			4L
Playden	40			5M
Peusmarsh	149		7	5L
Rye	300		300	5M
Selscombe	158		5	5K
Selehurst	488		28	6K
Tisehurst	247		3	6J
Udimer	97		1	5L
Warbleton	260		40	5J
Winchelsey	88		3	5L
Wartling	190		10	4J
Whatlington	70		3	5K
Ditchling	138		64	5G
Aldrington				4I
Bachington（Bechington－編者）				3I
Ovingdean				4G
Rottingdean				4G
An Account of the Inhabitants withinin the Peculiars of His Grace the Lord Arch Bishop of Canterbury in				
the County of Sussex				
Pallant	70		14	4B
Bersted	198		2	4C
Eastlavant	250			5B
Tangmer	63			4C
Pagham	160		40	4B
Heene	19	2		4E
Paching	69		1	4D
West-Tarring,and Salvington	201		2	4E
Darrington	71		1	5J
Ringmar	123	7	20	5H
Slindon	217	16	17	5C
South-Malling	74		1	4H
St.Thomas sub clivo	253	1	16	4G
Fruncfeild（Framfield－編者）	297	3		5I

Stanmer	43			4G
Isfeild	96		4	5H
Edberton	199		1	5F
Buxsted	411		18	6I
Uxfeild	215		8	5H
Mayfeild	1,190		10	6I
Wadhurst	995		5	6J
Linfeild	290		10	6G
The following Parishes, are within the Jurisdiction of the Revend the Dean of Chichester				
	117		7	
St.Martins	67			4B
St.Olaves	133			4B
St.Pancrasse	40		20	4B
St.Peter the Less	108		12	4B
St.Peter the Great	497	3	60	4B
New Fishbourne	33			4B
St.Bartholomew	82		3	4B
St.Rumbalds（Rumboldswyke）	30		14	4B
	53,271	390 (0.7%)	2,453 (4.4%)	合計 56,114

（出所） Ann Whiteman (ed.), *The Compton Census of 1676: A Critical Edition*, Oxford, 1986, pp.143–153.
（注） 位置の記載は、図1に基づく。

75家族（23%）が非国教徒だった。

その他、ライ（Rye）においては300人のアングリカン（コンフォーミスト）と300人の非国教徒がいた。「イングランド内戦勃発のときに、サセックスの都市ライは速やかに議会派への忠誠を宣言した。1640年代の空前の宗教的自由を活用して、ピューリタンの礼拝形式を取り入れた[69]」のである。ライに非国教徒が多く出現する理由の一つとして、当地がワロン人やフランス人のプロテスタント難民を受け入れてきたことがあるだろう。1562年フランス国内の宗教戦争、1568年フランスの第3次内戦、1572年8月24日サン・バルテルミの虐殺、1685年ナントの王令廃止を契機とする計4回の移民流入をライは経験している[70]。

他に、例えば、イースト・グリンステッド（7H）［コンフォーミスト767人、ノンコンフォーミスト28人］は、東部サセックスにおいて、バトル（5K）、クックフィールド（Cuckfield）（6G）と並ぶ、内地市場（inland markets）の中心だった。人口は、1548年600世帯（1,000人）、1676年800世帯（1,300人）、1724年310世帯（1,550人）であった[71]。また、ブライトン（4G）［コンフォーミスト1,740人、ノンコンフォーミスト260人］は港町である。ダウンランズで生産された小麦、大麦（barley）、麦芽 （malt）は、東に位置する港町ニューヘイヴン（Newhaven）と共にブライトンで積荷され、ライ、ヘイスティングズ、ロンドン、北ヨーロッパ諸港、ときに地中海地

域にまで運ばれた。

ところでサセックスおいては、ローマカトリックの分布を無視することはできない。たしかにカトリック［パピスト（“papists”）］は、人口比率では0.7%、プロテスタント・ノンコンフォーミストと比べるとその15.9%でしかなかったが、その分布には特徴的な点があると指摘されている。

センサスの中からカトリックが存在する教区を挙げてみると、バートン・ウィズ・コーテス（Burton with Coates）（6人）（ウエスト・サセックス、以下Wと表記）、イーストボーン（Eastbourne）（40人）（W）、ファーナスト（Fernhurst）（2人）（W）、ハーティング（Harting）（23人）（W）、フィトルワース（Fittleworth）（1人）（W）、ラーガシャル（Lurgashall）（2人）（W）、ミッドハースト（Midhurst）（56人）（W）、ロウゲイト（Rogate）（2人）（W）、ペタス（Petworth）（2人）（W）、ステッダム（Stedham）（4人）（W）、トロットン（Trotton）（2人）（W）、エスタゲイト（Eastergate）（1人）（W）、クラパム（Clapham）（14人）（W）、アランドル（Arundell）（4人）（W）、ホーシャム（Horsham）（30人）（W）、パラム（Parham）（1人）（W）、シップリィ（Shipley）（40人）（W）、アルディングボーン（Aldingborne）（2人）（W）、ボックスグローヴ（Boxgrove）（8人）（W）、フォニングトン（Funtington）（1人）（W）、アーサム（Eartham）（2人）（W）、アプ・マーデン（Up Marden）（12人）（W）、マーストン（Merston）（5人）（W）、シングルトン・アンド・チャールトン（Singleton & Charleton）（1人）（W）、ストウトン（Stoughton）（3人）（W）、ボウルニィ（Bolney）（1人）（W）、フォウキングトン（Folkington）（1人）（イースト・サセックス、以下Eと表記）、フラント（Frant）（10人）（E）、イーストグリンステッド（Eastgrinted）（5人）（W）、ロートン（Laughton）（1人）（E）、ロザフィールド（Rotherfield）（2人）（E）、ウァース（Worth）（16人）（W）、ウェスト・ファール（Westfirle）（43人）（E）、ウェストハム（Westham）（2人）（E）、フェアライト（Fairlight）（5人）（E）、アシュバーンハム（Ashburnham）（1人）（E）、ドリングトン（Dallington）（2人）（E）、オア（Oare）（5人）（E）、ヒーン（Heene）（2人）（W）、リングマァ（Ringmer）（7人）（E）、スリンドン（Slindon（16人）（W）、セント・トマス・スブ・クリヴォ（St.Thomas sub clivo）（1人）（E）、フラムフィールド（Framfield）（3人）（E）、セント・ピーター・ザ・グレート（St.PetertheGreat）（3人）（E）となっており、合計44教区でカトリックが検出される。

この中で、ウエスト・サセックス（W）に位置するのは30教区、イースト・サセックス（E）に位置するのは14教区であり、教区数を基準とした場合、カトリックは、2倍以上ウエスト・サセックスに位置していた[72]。

またカプランによれば、カトリックは大土地所有を維持する貴族・ジェントリーの家族と密接な関連があった。カトリックの領主としては、ボックスグローヴ教区（5C）—ケンプ（kemp）家、ミリントン（Millington）家、ノーフォーク公爵（Duke of Norfolk）家、バートン・ウィズ・コーテス教区（6D）—ゴーリング（Goring）家、クラパム教区（4E）—シェリー（Shelley）家、アプ・マーデン教区（5B）—マスュー（Matthews）家、レーン（Lane）家、イーストボーン教区

(6C)—モンテーギュ（Montague）家、マスユー家、ターナー（Turner）家、ハーティング教区(6B)—カーリル（Caryll）家、ホーシャム教区（7E）—ウェストン（Weston）家、ノーフォーク公爵家、ミッドハースト教区（6B）—モンテーギュ家、ターナー家、クロウ—チャー(Croucher）家、シップリィ教区（6E）—カーリル家、スリンドン教区（5C）—ケンプ家、イーストグリンステッド教区（7H）—ビドゥルフ（Biddulph）家、ゲージ（Gage）家、フェアライト教区（4L）—アクトン（Acton）家、オア教区（4L）—グルドフォド（Guldeford）家、モンテーギュ家、ウェスト・ファール教区（4H）—ゲージ家、ウェストハム教区（4J）—ポーター（Porter）家、ウァース—ゲージ家、等が挙げられる[73]。こうした諸家は、世代を越え長期にわたりカトリック信仰を維持し、自家に仕えるカトリック農民を保護していたのである。すなわち「イングランドの宗改革以後のカトリシズムは、本質的に領主の宗教だった[74]」（T.McCann）と考えられるのである。

本稿では、紙幅の関係もあり、18世紀以降になされた教会巡察（査察）については扱わない。それは今後の課題としたい。参考までに、1851年の宗教センサス以前においては、1717年から1728年に実施されたエヴァンズ・リスト（現在、ウィリアムズ博士記念図書館に所蔵）、バプテスト派牧師ジョゼフ・トンプソン（Joseph Thompson）の収集した史料（対象時期：1715～1716年、1772～1773年）が利用されるべきだろう[75]。

5．結語—今後の展望

近年の17世紀イングランド地域史においては、宗教史（教会史）を中軸に展開する研究が多数見うけられる。これは、経済的利害関係を主たる対象としてきたわが国のイングランド経済史にとっては手薄な領域であり、宗教社会学的観点からの接近は、経済史を地域史に組み込む際にも、避けて通れない課題である。従来、経済史においては、階級・経済的利害と政治を暗黙のうちに直接的に結びつけてきたが、近年の研究は、宗教と政治の関係が最初に問われなければならないことを示している。

1642～1660年の内戦・革命・空位期をどのような観点で捉えるか、においても、きめ細かい史実の整理を通じて、経済的な利害関係や資本の対立を第一に考えるのではなく、宗教摩擦を基軸として分析すべきことが広く合意されている。

本稿の対象としたサセックスにおいても、東部に広がるウィールドは議会派を強く支持する傾向があり、反対に、西南部に広がる平場地帯においては、王党派を指示する傾向があった、といわれている。ピューリタニズムと＜カトリック化＞した国教会との宗教的分裂が党派構成を生む際にも強く働いたのである。ウィールドに根付いたピューリタニズムの伝統は、王政復古以降においても消滅することなく、国家からの排除と差別的扱いの中、長老派、独立派（会衆派）、クエーカーなど、セクト化した形で集会（congregations）が維持されていく。非国教徒は社会の極少数派（表

向き平均、人口の5%弱程度）として、ジェントリーや多くの中産層以下の人びとによって担われていく。非国教徒が農村工業（プロト工業化）地帯に現れやすかったということは、彼らの主たる職業についても、純粋な農業者というよりは、何らかの職人的工業活動にも従事していたと考えるのが自然であろう。ただし、コンプトン・センサス以降、サセックスの非国教徒の勢力は激減し、同センサスでは非国教徒の欠如する教区が49あったのに対し、1724年の査察においては、約100の教区で非国教徒が存在していなかった、といわれる[76]。しかし、その後の趨勢を辿ると、宗教的摩擦は消滅することなく、やがて19世紀ともなるとチャーチ（イングランド教会）とチャペル（非国教徒の集会）の対立という構図で、政治の場面に受け継がれていくことになる[77]。現在では、トーリー対ホイッグの政治的対立は、階級や経済的利害というよりは、宗教的対立を軸に検討される必要があると考えられている。

カトリックの伝統も記憶しておく必要がある。サセックスでは伝統的な貴族やジェントリーの中にカトリック信仰を維持し続ける家族がおり、社会的差別意識が蔓延していても、彼らが周囲のカトリック農民を保護しながら、信仰者であり続けたのである。

プロト工業化という観点から見ると、ウィールドはやがて脱工業化（de-industrialization）する地域である[78]。その点、サセックスは、産業革命へと向かう「工業化の第二局面」を経験したランカシャーやヨークシャーとは違った軌跡を辿ることになる。だが、いずれの地域においても、工業化と非国教徒との間に何らかの親和的関係があることが解明されている。その場合、両者の直接的関係というよりは、独自の社会環境――おそらく領主規制、共同体規制の脆弱性――を前提として、両者が並行して出現しやすかったというべきである。これは、19世紀の用語を用いるならば、「開放型村落」（open villages）に人口が集中する傾向があり、移出、移入もしやすく、工業化が生じやすい環境にあったということであるが[79]、この用語が使用されなくとも、17世紀において、同一環境が農村工業や非国教徒の出現にも作用していたと考えられる。アングリカン（コンフォーミスト）が強く根を張る西部の平場穀作地帯――のちの「閉鎖型村落」（closed villages）――では、工業化への動きは生じない。

これとの関連で、従来、わが国の研究史では、マナ（荘園）の解体を前提として、農村工業の出現を語ってきたが、それは史実と整合的ではない。マナの解体は、定期借地化つまり合理的農業の形成に向かうことはあっても[80]、そこから直接農村工業が出現することはない。農村工業は、元来、開放耕地制度が支配的でない地域から広がる傾向があったのである。

【注】

1) 今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会』みすず書房、1988年、13-102頁、「第1章　ピューリタニズムと近代化」。同『バクスターとピューリタニズム―17世紀イングランドの社会と思想』ミネルヴァ書房、2006年、57-119頁、「第3章　ピューリタニズムと経済」、「第4章　ピューリタニズムと社

会」で示された地帯構造別のピューリタニズムの検出は、「非信従・非国教主義者の伝統」を確認する作業である。修正主義の影響から、政治史的、神学的、外交的側面から研究が進められている一方で、イングランドにおいては、権力論的、共同体論的側面からの宗教研究も数多く存在していることに、わが国のイングランド史研究は留意すべきである。今関同志社大学名誉教授は後者の研究動向を的確に紹介している。分析方法の相違は、互いを排除するものではなく、むしろ相互に理解を深めることになる。

2) K. D. M. Snell and Paul S. Ell, *Rival Jerusalems: The Geography of Victorian Religion*, Cambridge, 2000 は、この分野の集大成である。早計にも本書の分析視角を〈地理的決定論〉や〈経済的決定論〉と誤解してはならない。本書は、細部に至るまで実証（史実）に気遣いながら、権力論・共同体論を視野に入れた、イングランド史らしい総合的分析手法だからである。

3) 松浦高嶺『イギリス近代史論集』山川出版社、2005 年、33 頁。岩井淳『ピューリタン革命と複合国家』山川出版社、2010 年、48 頁。

4) R. C. Richardson, *Puritanism in North-West England: A Regional Study of the Diocese of Chester to 1642*, Manchester University Press, 1972. B. G. Blackwood, *The Lancashire Gentry and the Great Rebellion 1640–60*, Manchester, 1978. David Underdown, *Revel, Riot and Rebellion: Popular Politica and Culture 1603–1660*, Oxford, 1985. Ann Hughes, *Politics, Society and Civil War in Warwickshire, 1620–1660*, Cambridge, 1987. David Rollison, *The Local Origins of Modern Society: Gloucestershire 1500–1800*, Routledge, 1992. Mark Stoyle, *Loyalty and Locality: Popular Allegiance in Devon during the English Civil War*, University of Exeter Press, 1994. A. R. Warmington, *Civil War, Interrehnum and Restoration in Gloucestershire 1640–1672*, Royal Historical Society, 1997. こうした諸文献は、地域史の中で、宗教の重要性を強調する点では共通しており、いわゆる「修正主義」の立場とも一致する。しかし個別的な史実分析を時系列で重ねていく手法をとる修正主義では、権力や共同体という視点は欠如しがちである。歴史家は両者の分析の長所・短所を常に意識すべきである。従軍牧師リチャード・バクスター（Richard Baxter）の『自叙伝』における有名な文章、「イングランドのいくつかの州では、騎士やジェントリーの大部分は、国王の側についた。……そしてこれらのジェントリーの小作人や、賤民とよばれるきわめて貧しい人びとも、大部分はジェントリーに従って国王側についた。議会側には、……たいていの州のジェントリーの一部と、商工業者やフリーホルダーや中産階級の人びとの大部分がおり、とくに毛織物などの工業に依拠する都市や州では、そうであった」（今井宏訳）は、上記の諸文献の結論とも一致している。バクスターの証言は、政治史的・外交史的分析が主流の現在においても、事件を目撃した同時代人のそれとして、絶えず記憶に留める必要がある。「この他、同時代の観察には、両派の陣営構成に一定の社会性、地域性が働いていたことを証言づける史料は多い」という今井氏の一文は、単純な公式的、図式的把握を受け入れないのを当然の前提としても、イングランド地域史においては広く確認されていることである。今井宏『イギリス革命の政治過程』未来社、1984 年、26 頁。

5) Thomas May, *The History of the Parliament of England, which Began November 3, 1640: With a Short and Necessary View of Some Precedent Years*, Oxford University Press, 1854, p.221. 王党派の勢力については、財産没収、示談金のリストからも判断できる。William Durrant Cooper, Royalist Composiotion in Sussex during the Commonwealth, *Sussex Archaeological Collections*, Vol. 19, 1867, pp.91–120.

6) ピューリタン指導者はジェントリーが中心であったとか、非国教徒は常に少数派であったという、正当な批評や批判を受け入れつつも、ヴェーバー論文は、イングランドの初期工業化過程の一側面との関連で、つねに再検討される価値がある。梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム—神と富の間』新教出版社、2010 年は、この分野の最新の研究として意義深い。農業の合理化（大土地所有の形成）の中で、やがて消滅する運命にある平場穀作地帯の〈ヨーマン〉を注視して、「ヨーマンは近代英国のトレー

ガーでもなければ……」と論理を展開するのは、じつは別の史実を語っているのであり、避けねばならないだろう。工業化を語る場合、現段階の研究においては、農村工業地帯のフリーホルダーとしての「ヨーマン」を論じる必要がある。越智武臣『近代英国の起源』ミネルヴァ書房、1966年、257-258頁。Christopher Hill, *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England*, Secker & Warburg, 1964, pp.124-144, The Industrious Sort of Peopleは、現在でも17世紀イングランド史の重要テーマの一つである。

7) F. メンデルス・R. ブラウン他著，篠塚信義・石坂昭雄・安元稔編訳『西欧近代と農村工業』北海道大学図書刊行会、1991年、124-127、130-131、142-143、158頁の記述は、近年の諸研究の成果と整合的に重なる。Barry Coward, *Social Change and Continuity: England 1550-1750*, Revised Edition, 1997, pp.14-17、「4章　対照的なコミュニティーズ（Contrasting Comunities）」は、農業史では周知の基本的認識事項である。Peter Laslett, *The World We Have Lost*, Methuen, 1965, p.59.［ラスレット、川北稔・指昭博・山本正訳『われら失いし世界—近代イギリス社会史』三嶺書房、1986年、83-84頁。］ラスレットは日本の読者には良く知られた研究者であるが、そこで記載された「開放的な教区と閉鎖的な教区がある」（there were the open and closed parishes）という表現に注目すべきである。

8) 17世紀イングランドの地域（経済）史にどのような方法論を通じて接近するかについて、例えば以下の研究は、その典型を示している。B. Gordon Blackwood, *Tudor and Stuart Suffolk*, Carnegie Publishing, 2001. すなわち、地誌（topography）、人口、経済、政治・社会、宗教改革、パピスツ（papists）およびピューリタニズム、内戦、空位期（the Interregnum）、王政復古、名誉革命の順である。地誌の検討により、社会的背景を詳しく捉えておいて、そこから人口動態・政治・経済・宗教を論じるのである。プロト工業化論を産業立地観点から、共同体論を軸に論じている地理学的文献には、以下がある。R. A. Dodgshon and R. A. Butlin (eds.), *An Historical Geography of England and Wales*, Academic Press, 1990, pp.199-222, Industry and Towns 1500-1730.

9) 非国教徒（カルヴィニズム）のエトスが、現在のイギリス（Britain）の経営倫理の一つとして紹介されているのは、興味深い。David J. Jeremy, *A Business History of Britain, 1900-1990s*, Oxford, 1998, pp.526-555.

10) 塚田理編『イギリスの宗教』聖公会出版、1980年、58-75頁、「第4章　アングリカンとピューリタン」（松浦高嶺）は、二項対立すぎる設定かもしれないが、イングランド教会史の基本的な理解のためには、有効である。Ann Hughes, *The Causes of the English Civil War*, Second Edition, Macmillan, 1998, pp.114-148. 第3章の「社会的・文化的衝突？」（A Social and Cultural Conflict？）は、異なる制度的要因が、政治史、宗教史の背後に存在したことを示している。政治史を中心とする時系列的、ミクロ的分析ではこぼれ落ちてしまう視点であるから、一層の強調・確認が必要となる。18～19世紀の地方史でも、用語は異なるが、同様の分類がなされており、貴重な類型的把握である。

11) 梅津順一教授の指摘（前掲書、45-70頁）にもあるように、ヴェーバーは人間類型論を論じる際に以下の文献に影響されている。Edward Dowden, *Puritan and Anglican: Studies in Literature*, Third Edition, Kegan Paul, 1910.

12) マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1989年、132-133頁。

13) Jeremy Goring, *Godly Exercises or the Devil's Dance? Puritanism and Popular Culture in Pre-Civil War England*,Dr. Williams's Trust, 1983, p.3.

14) Christina Hole, *British Folk Customs*, Hutchinson, 1976, pp.136-137. Leah S. Marcus, *The Politics of Mirth: Johnson, Herrick, Milton, Marvell, and the Defense of Old Holiday Pastimes*, University of Chicago Press, 1986, pp.140-168, Churchman among the Maypole: Herrick and the Hesperides. メイポールの背後にあるもの

は、キリスト教からみれば、神々（“gods”）であり異教信仰（Paganism）であるが、その内容は、マジック、オルギー、奔放な性（rampant sexuality）の問題である。マーカスは単なるポピュラー・カルチャー論でなく、宗教社会学の深みにまで触れており、イングランド文化史のみならず、ヨーロッパ文化史を対象とする際にも、参考になる。

15) Magaret Jane Kidnie (ed.), *Philip Stubbes, The Anatomie of Abuses*, Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2002, p.209.（原著は 1583 年）

16) Barry Rea, *Popular Cultures in England 1550–1750*, Longman, p.139.

17) Nicholas Tyacke, Popular Puritan Mentality in Late Elizabethan England [in Peter Clark, Alen G. R. Smith and Nicholas Tyacke (eds.), *The English Commonwealth 1547– 1640: Essays in Politics and Society presented to Joel Hursfield*, Leicester University Press, 1979], p.79.

18) *Ibid*., p.90. ピューリタニズムの出現よりもさらに遡って、1534 年のイングランド宗教改革は、上からの改革だったのか、あるいは下からの促しが呼応していたのか、という周知の論争がある。サセックスについていうならば、その回答は、両者ともに「肯定（イエス）」である。なぜだろうか。それは、「地域」によって、反応が異なったからである。ゴーリングは、当局があてがう信仰と礼拝パターンに大多数の人々は喜んで従ったと断った上で、「イースト・サセックスは、ウエスト・サセックスと比べて、宗教改革への支持が多くあった。ダウンズと比べると、ウィールドの方が宗教的変化に熱心であった。純粋な農業的地方と比べると、都市（towns）や工業地域の方がプロテスタンティズムの積極的な兆候が存在した」と記す。この表現は、19 世紀後半に至るまでの当州の教会史の基軸であることに注意すべきだろう。Jeremy Goring, Reformation and Reaction in Sussex 1534–1559, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.134, 1996, p.151.

19) Julian Cornwall, Farming in Sussex, 1560–1640, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.92, 1954, p.48. The Geography Editorial Committee: University of Sussex (ed.), *Sussex: Environment, Landscape and Society*, Alan Sutton, 1983, pp.33–49. Cameron Louis (ed.), *Records of Early English Drama: Sussex*, Brepols Publishers and University of Tronto, 2000, p.xi.

20) 5 世紀後半以降のアングロ・サクソンの初期定住地を調べると、サセックスについては、西南部の the Chalk and Greensand escapments に集中している。初期の居住地は、最も地味の肥えた地域だったのである。この現象は、有核村落が形成される背景として常に記憶すべきである。S. W. Wooldridge and D. L. Linton, Some Aspects of the Saxon Settlement in South-East England Considered in Relation to the Geographical Background, *Geography*, Vol.XX, 1935, pp.163, 171–173.

21) C. E. Brent, *Employment, Land Tenure and Population in Eastern Sussex,1540–1640*, A Thesis Submitted to the University of Sussex for the Degree of Doctor of Philosophy, 1973, p.201.

22) Ernst Straker, Ashdown Forest and Its Inclosures, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.81, 1940, pp.119–135. 16～18 世紀の長期にかけて、継続的ではないが、スモール・エンクロージャー（small inclosures）がおこなわれている。

23) Joan Thirsk (ed.), *The Agrarian History of England and Wales*, Vol.Ⅳ, Cambridge, 1967, p.55.

24) G. E. Fussell, Four Centuries of Farming Systems in Sussex, 1500–1900, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.90, 1952, p.60.

25) Ernest Straker, Agricultural History in Hundred of Hartfield, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.76, 1935, p.173.

26) C. E. Brent [1973], *op.cit*., p.209.

27) Julian Cornwall, Farming in Sussex, 1560–1640, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.92, 1954, pp.48–67.

ダウンランズは「穀作・牧羊農業」(Corn and Sheep Farming) といえる。

28) John Godfrey and Brian Short, The Ownership, Occupation and Use of Land on the South Downs, 1840–1940: A Methodological Analysis of Record Linkage over Time, *Agricaltural History Review*, Vol.49, Part 1, 2001, pp.58–59.

29) John Godfrey, Land Ownership and Farming on the South Downs in West Sussex c.1840–1940, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.140, 2002, pp.114–116.

30) Brian Short, The de-industrialisation Process: A Case Study of the Weald, 1600–1850 [in Pat Hudson (ed.), *Regions and Industries : A Perspective on the Industrial Revolution in Britain*, Cambridge, 1989], p.160. C. E. Brent [1973], *op.cit*., p.115. C. E, Brent, Rural Employment and Population in Sussex between 1550 and 1640, Part One, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.114, 1976, pp.30–31.

31) C. E. Brent [1973], *op.cit*., p.180.

32) *Ibid*., pp.54, 176.

33) C. E. Brent, Rural Employment and Population in Sussex between 1550 and 1640, Part Two, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.116, 1978, p.41.

34) *Ibid*., p.125.

35) L. A. Clarkson, The Organization of the English Leather Industry in the Late Sixteenth and Seventeenth Centuries, *Economic History Review*, Second Series, Vol.XIII, 1960, pp.245–246.

36) *Ibid*., p.248.

37) L. A. Clarkson, The Leather Crafts in Tudor and Stuart England, *Agricultural History Review*, Vol.XIV, 1966, pp.35, 39.

38) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *An Historical Atlas of Sussex*, Philimore, 1999, pp.106–107.

39) M. Beswick, Brick and Tilemaking on the Dicker in East Sussex, *Sussex Industrial History*, No.13, 1983, pp.2, 4–9.

40) J. R. Armstrong, *A History of Sussex*, Phillimore, 1995, p.73.

41) The Geography Editorial Committee: University of Sussex (ed.), *Sussex: Environment, Landscape and Society*, Alan Sutton, 1983, p.131.

42) Peter Brabdon and Brian Short, *The South East from AD 1000*, Longman, 1990, p.190.

43) P. Austin Nuttall (ed.), *The History of the Worthies of England by Thomas Fuller*, Vol.III, M.DCCC. XL, p.242.

44) H. R. Schubert, *History of the British Iron and Steel Industry from c.450 B.C. to A.D.1775*, Routledge & Hegan Paul, 1957, p.34.

45) *Ibid*., p.107.

46) *Ibid*., p.108.

47) *Ibid*., p.165. C. S. Cattell, The 1574 Lists of Wealden Ironworks, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.117, 1979, p.166.

48) H. R. Schubert, *op.cit*., p.167.

49) *Ibid*., p.168.

50) Brian Awty and Christopher Whittick, The Lordship of Canterbury, Iron-founding at Buxted, and the Continental Antecedents of Cannon-founding in the Weald, *Sussex Archaeological Collections*, No.140, 2002, p.75. 以下の文献にウィールドの溶鉱炉と鍛冶場の一覧が整理されている。Jeremy Modgkinson, *The Wealden Iron Industry*, History Press, 2008, pp.141–148.

51) H. R. Schubert, *op.cit*., pp.170–172. Charles Dawson, Sussex Iron and Pottery, *Sussex Archaeological Collec-*

tions, Vol.46, 1903, p.17.「サセックスが大量に大砲を供給するようになるのは16世紀になってからであった」という指摘がある。

52) G. E. Fussell, Four Centuries of Farming Systems in Sussex, 1500–1900, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.90, 1952, p.61.

53) D. W. Crossley (ed.), *Sidney Ironworks Accounts 1541–1573*, Camden Forth Series, Volume 15, 1975, pp.36–37.

54) L. F. Salzman (ed.), *Victoria County History, Sussex*, Vol.4, 1953, pp.21–27.［British History Online を利用］

55) *Ibid*., pp.54–58.

56) T. P. Hudon (ed.), *Victoria County History, Sussex*, Vol.6, Part 1, 1980, pp.154–164.

57) Jeremy S. Hodgkinson, The Decline of the Ordinance Trade in the Weald, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.134, 1996, p.162.

58) 中村勝己「ピュウリタニズムの検出—近世イギリス思想史研究序説（二）—」『三田学会雑誌』73巻3号、1980年、131(451)-145(465) 頁。

59) コンプトン・センサスの詳しい史料批判として以下の文献が利用可能。Thomas Richards, *The Religious Census of 1676: An inquiry into its Historical Value, Mainly in Reference to Wales*, Cymmrondorion Society's Publications, 1927.（本書を中村勝己慶應義塾大学名誉教授から借り受けることができた。記して謝意を表したい。）

60) J. H. Cooper, A Religious Census in 1676, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.45, 1902, p.143.

61) J. H. Cooper, Return of Conventicles in Sussex, 1669, and King Charles' Liences for Nonconformists, 1672, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.51, 1908, p.1. クーパーは集会数を50としているが、それは presbyterians & Independents をそれぞれ別々にカウントし、同一（つまり1）ではなく、2とみなしたからだと思われる。

62) A. Ridley Bax, The Free Churches of Sussex, Part Ⅰ, *Transactions of Congregational Historical Society*, Vol. Ⅴ, No.2, 1911, p.106.

63) Colin Brent, Lewes Disseneters Outside the Law, 1663–86, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.123, 1985, p.201.

64) *Ibid*., p.203. 当然のことではあるが、繊維・衣料の製造販売者を国教徒が担うことも通例であった。その事実から、宗派と職業には直接的な関連性はないとの立論も可能なわけである。考えさせられるのは以下の点である。すなわち、ブレントによれば、酒場経営者や酒類販売業者が政治的なトーリー主義（Toryism）の砦（bastion）であり、とくにクエーカーはトーリーの訴追者（prosecutors）の「飲んだくれ」（sottishness）を強調し、そのことは、飲酒や酒場（alehouses）に対する広くピューリタン的な蔑視（disdain）を示していた。ブレントは、万が一非国教徒が営業許可申請をしたとしても政治的理由から拒絶されたとしながらも、150世帯を越えるリューウェスの非国教徒のすべては、酒類販売や酒場経営をボイコットしたであろうと、指摘する。泥酔に対する非国教徒の懸念は、禁欲的プロテスタンティズムの一つの特徴でもあるから、ブレントの指摘は興味深い。Colin Brent, The Neutering of the Fellowship and the Emergence of a Tory Party in Lewes (1663–1688), *Sussex Archaeological Collections*, Vol.121, 1983, p.101.

65) Brian Manning, *The English People and the English Revolution*, Penguin Books, 1978, p.244. 本書は階級史観を前提に書かれており、修正主義の側からは批判の対象になる。けれども、内戦の地帯構造別の分析をする場合には、現在でも有用な指針を与えてくれる古典ともいえる。農村工業地帯が議会派につく傾向があることを、これほど詳細に記した研究書はないだろう。農村工業地帯においては、国王の暴政

に抵抗し、ピューリタニムに基づく教会改革を支持者する者が指導者（貴族、ジェントリー）の背後に数多く存在したのである。他方で、バランスの取れた歴史像を構築するためにも、内戦への抵抗を示すクラブメン（clubmen）についても整理する必要がある。Michael Braddick, *God's Fury, England's Fire: A New History of the English Civil Wars*, Penguin Books, 2009, pp.413-414, 416-417, 421, 428. 時系列の叙述では、Colin Brent, *Pre-Georgian Lewes: c890-1714 the Emergence of a Country Town*, Colin Brent Books, 2004, pp.289-318, The Great Rebellion and Its Aftermath 1625-1662 が参考になる。

66) Jeremy Goring, *Burn Holy Fire Religion in Lewes since the Reformation*, Lutterworth Press, 2003, pp.60-62, 94. ゴーリングの以下の記述に注意すべきである。「アングリカン—非国教徒の分裂は、教育面で顕著であったが、政党政治（party politics）となると、はるかに深刻な問題となった。リューウェスにおいては、この時期のイングランドの他の場所と同様に、イングランド教会は、適切にも'the Tory party at prayer'として描写された。これは、1816年の議会補欠選挙で明白であった。……かろうじて敗れたホイッグの候補者は、都市の非国教徒の圧倒的大多数により支持されていた。この選挙では、宗教的な連携（affiliations）がとりわけ重要であったと思われる」（*Ibid*., p.107）。これは、宗教—政治という観点の重要性の指摘である。

67) W. K. Rector, Lewes Quakers in the Seventeenth and Eighteenth Centuries, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.16, 1978, pp.31-40. 日本における初期クエーカー史については、西村裕美『子羊の戦い—17世紀クェイカー運動の宗教思想』未来社、1998年がある。「……1654年の初夏にそれまで北部のみを巡回していた彼らが初めてイングランド南部へ布教に出かけたが、その約70人の信徒説教者たちの職業をE.E.テイラーのリストから書き記せば、以下のようになる。すなわち、ジェントルマン、ヨーマン（ないしはジェントルマン）、ハスバンドマン（ないしはヨーマン）であり、彼らは副業としてシャツ類販売、洋服商、毛皮商および手袋製造、靴製造、放牧および食肉販売などをしている。その他の職業としては、粉挽き、織布工、服の仕立て、他家での使用人ないしは臨時労働者、秘書・速記者など事務職、教師などがあげられる。他方、1650年代の南部のクェイカーたちの社会層については、先のバーバーは、……名家出身者を別にすれば、農村地帯では、織物・布地商を副業としながら農業に従事するか、都市部では食料品販売、服の仕立てなどの家内工業などが中心で、彼らはプロレタリアでもなく、ジェントリーでもない中産階級であったと述べている」（同書、79-80頁）と指摘する。またヴァンを元に「……1662年までのクェイカーの社会層はジェントリーの中でもそれほど身分の高くないものとともにヨーマンと卸売商が中心で、未熟練労働者をも含むあらゆる階級から出たということ、そして、1670年以降クェイカー運動に参入する者については、小売商、職人、労働者など共和制期よりも社会的身分の低い人々であることをつきとめた」（同書、110頁）とする指摘にも注意すべきである。というのも、都市や開放型教区で活動する「初期資本主義の担い手」としてのクエーカーの特徴が描かれているからである。当州のクエーカーについては以下の論文も参照可能。Perceval Lucas, Some Notes on the Early Sussex Quaker Registers, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.55, 1912, pp.74-96.

68) A. J. Fletcher, Puritanism in Seventeenth Century Sussex [in M. J. Kitch (ed.), *Studies in Sussex Church History*, Leopard's Head Press, 1981], pp.141, 155.

69) Michael Allison, Puritanism in Mid 17th-Century Sussex: Samuel Jeake the Elder of Rye, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.125, 1987, p.125.

70) William Durrant Cooper, Protestant Refugees in Sussex, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.13, 1891, p.180. Jeffrey S. Chamberlain, *Accommodating High Churchmen: The Clergy of Sussex,1700-1745*, University of Illinois Press, 1997, p.89.

71) C. E. Brent, Urban Employment and Population in Sussex between 1550 and 1660, *Sussex Archaeological*

Collections, Vol.113, 1975, p.35.

72) Neil Caplan, The Sussex Catholics c.1660–1800, *Sussex Archaeological Collections*, Vol.116, 1978, p.24.

73) *Ibid*., p.27.

74) Kim Leslie and Britain Short (eds.), *op. cit.*, p.56. A. D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England: Church, Chapel and Social Change 1740–1914*, Longman, 1976, p.15.

75) A. Ridley Bax [1911], *op.cit.*, pp.113–115. A. Ridley Bax, The Free Churches of Sussex, Part II, *Transactions of Congregational Historical Society*, Vol. V, No.3, 1911, pp.163–180. バックスの論文は詳細な史料紹介である。

76) Jeffrey S. Chamberlain, *op.cit*., pp.89–91.

77) リューウェスにおける選挙の投票パターンの分析により、選挙がいかに宗教に影響されていたかわかるだろう。C. E. Brent, The Immediate Impact of the Second Reform Act on a Southern County Town: Voting Patterns at Lewes Borough in 1865 and 1868, *Southern History*, Vol.2, 1980, pp.129–177. ヴィクトリア朝の教会立地については、以下の文献が参考になる。D. Roberts Elleray, *The Victorian Churches of Sussex*, Phillimore, 1981.

78) Maxine Berg, *The Age of Manufactures, 1700–1820: Industry, Innovation and Work in Britain*, Second Edition, Routledge, 1994, p.113. ウィールドは、プロト工業化から工業化への「移行に失敗した」(failed transition) 古典的な事例である。

79) June A. Sheppard, Small Farms in a Sussex Weald Parish, *Agricultural History Review*, No.40, Part II, 1992, pp.129, 131. シェファードによると、ウィールドのチディングライ（5I）は、他のウィールドと同様に、多数の土地所有者からなる開放型教区であり、1839年においても99人の土地所有者がいた。その内9人が250～500エーカーを所有し、彼らが教区の約2/3の土地を所有していた。他方で75エーカー未満を所有する者が89人いた。主要な農作物は、小麦やオート麦、豆類だったが、家畜の飼育もしていた。さらにそれを補完するものとしてクローバー、家禽、鶏卵もあったが、多くの農民は、季節ごとの、あるいは機会ごとの鍛冶（blacksmith）、レンガ製造（brickmaker）、宿屋（innkeeper）のような副業にも従事していた。新井嘉之作「開放村落と閉鎖村落—三分制確立期のイングランド農村—」『安田女子大学紀要』No.5、1975、1-11頁は小編であるけれども、イングランド農村社会の基本構造を確認する上で重要な指摘であった。「open parish、close parishという用語は1830年頃から始まったようだが、両者に分類する立場はもっと以前から起こっている。……1760年代にArthur YoungやRichard Burnがより的確に述べている」と新井氏は記す。ロジャー・ノース（Roger North）が1690年以前に記したと思われる文章を次のように引用する。「近年のジェントルマンは、彼の所領の屋敷や小屋を破壊して、人間が彼らの所領に住めないようにするという気風を持ち始めたが、これは人口増加の妨害というよりは、人民にとって極めて重大な破壊である。彼らは、貧民は教区にとって厄介者と考えているので、この措置はしばしば鉄面皮におこなわれた」（2頁）。ノースの記述は、閉鎖型（村落・教区）の特徴をよく示している。宗教的差別や少数派の除外が通例であった時代では、イングランド教会に忠実なジェントルマンが非国教徒を排除しても、それは当然の行為であった。中村勝己「レスターのピュウリタニズム（I）」『三田学会雑誌』81巻1号、1988年、18-55頁。レスターシャーの詳細な宗教社会学的分析の中で、非国教徒の地理的分布の特徴に関して中村慶應義塾大学名誉教授は、「まずレスター市を中心にして、ソー川沿いにラフバラからマーケット・ハーバラを結ぶ北西から東南に走る線の以西および以南にかけて、非国教徒が多く分布する教区が密集している。この地方は大領主の乏しい、繁栄する中位ジェントリーの多い非古典荘園地域であった。1279年には領主直営地の比重が低く、賦役比重が低く、自由保有農が慣習保有農より、高い比重を占めていた。1450～1550年および1550～1750年までにエンク

ロージャーが進行して、村落共同体規制を解体してしまった地域が多く、非国教徒の多い教区とこれら上段階の、エンクロージャー地域とは、地域的にほとんど重なり合っている。非国教主義と共同体規制の強度との関連はきわめて興味がある課題であり、近年、イギリス経済史学会でも注目され、優れた研究があらわれている」(49頁) と指摘する。共同体規制や支配者の権力論は、忘れてはならない歴史学の基本視点である。イングランドでは、経済史よりもむしろ、経済地理学や宗教地理学の分野で、歴史学の基本的な分析視点が受け継がれているのは、興味深い現象といえる。

80) Robert C. Allen, *The British Industrial Revolution in Global Perspective*, Cambridge, pp.64–65.